学位論文要約

東アジアの民話を巡る教育文化史研究

広島大学大学院　教育学研究科　博士課程後期
学習開発専攻　カリキュラム開発分野

D152877
黒川　麻実

Ⅰ.論文目次

序章　研究の目的・方法
第一節　研究の背景
第二節　研究の目的・方法
第三節　研究の位置・意義
第四節　用語設定

第一章　〈教育文化史〉の視点から東アジアの教材を捉える必要性
第一節　国語科教育の場における教材「三年とうげ」の位相
第二節　国語科教育以外の場における「三年峠」を巡る議論
第三節　「三年峠」を巡る〈教育文化史〉の構築に向けて

第二章　「三年峠」を対象にした通時的分析
第一節　マクロ的視点からみる「三年峠」の通時的分析
第二節　ミクロ的視点からみる「三年峠」の通時的分析
第三節　「三年峠」の影響関係の考察

第三章　「三年峠」を対象にした共時的分析
第一節　植民地期朝鮮における「三年峠」の発展
第二節　教材「三年고개」を巡る植民地教育の思想
第三節　戦後韓国において再び教材化される「三年峠」
第四節　李錦玉による民話の再話創作とその教材化

第四章　「三年峠」の〈教育文化史〉から見えてくること
第一節　口承での「三年峠」の伝達経路
第二節　「三年峠」の改作／継承を巡る考察
第三節　東アジア／民話／教材の側面から見る「三年峠」

第五章　「兎の裁判」の〈教育文化史〉研究
第一節　「兎の裁判」の〈教育文化史〉の展開に向けて
第二節　「兎の裁判」を対象にした通時的分析
第三節　「兎の裁判」を対象にした共時的分析
第四節　「兎の裁判」の〈教育文化史〉から見えてくること

第六章　「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究
第一節　「馬頭琴」の〈教育文化史〉の展開に向けて
第二節　「馬頭琴」を対象にした通時的分析
第三節　「馬頭琴」を対象にした共時的分析
第四節　「馬頭琴」の〈教育文化史〉から見えてくること

終章　本研究の成果・課題・展望
第一節　本研究の成果を踏まえた総合考察
第二節　本研究の課題と展望

主要参考文献

Ⅱ.研究の目的と方法

(1)研究の背景

これまでの国語科教育研究における教科書教材史的研究は、様々な領域においてそれぞれの問題意識や視点・方法から取り組まれており、研究成果の蓄積がなされてきた[1]。その背景には国語科教科書という媒体が子ども達の内面形成に深く関与し、また子ども達を取り巻く言語文化を牽引したメディアであることが影響している[2]。国語科教科書の歴史的変遷から見える景色の先には、教育内容の措定の様相、同時代の言説や文化史、そして我が国における「国語」醸成の過程など、現在とは無関係ではない問題が様々に散りばめられている[3]。このようなことから、国語科教科書や内包されている教材に関わる歴史的研究は、通時的にも共時的にも自己の今いる位置を見定め、未来の国語科教育の在り方を模索していく上で、非常に重要な研究領域であると言うことができる[4]。

一方、国語科教育研究者以外の文学研究者や歴史研究者からは、国語科教科書に掲載されている教材の歴史的背景が十分に検討されていないという指摘がなされ、教材の歴史性への視点を欠いた国語科教育研究の態度が、国語科教材をお馴染みの定番教材の正当性へと堕し歴史を忘却するための装置を作り上げているのではないかと危惧されている[5]。実際にそのような指摘は、小学校国語科教科書における東アジアの民話教材を巡りなされている。例えば、本研究の研究対象の一つである朝鮮半島由来の民話教材「三年とうげ」について、国語科教育研究者以外の分野の研究者からは、戦前の植民地期朝鮮における帝国日本による植民地政策の一環として既に利用されていたこと、教材の作者が在日朝鮮人児童文学作家であることに触れ、教材「三年とうげ」を通し「韓国・朝鮮(人)らしさ」の言説を読み込ませようとする教育現場に疑問が投げかけられている[6]。また、同じく本研究の研究対象であるモンゴルの民話として有名な教材「スーホの白い馬」についても、本来のモンゴル文化との隔たりが指摘され、その要因として伝承の過程に存在する中国人や日本人の児童文学作家による再話創作の際に埋め込まれたイデオロギーが働いていることが示唆されている[7]。

これらの先行研究で取り上げた教材の共通項として、東アジアに由来する民話であり、その背景に複雑な伝承過程を有しているということ、また児童文学作家によって再話創作された作品が教材化されたものであるということを挙げることができる。このことは、戦前の帝国日本の植民地政策を含み込んだ東アジアにおける民話の問題、戦後の児童文学作家による再話創作活動によって生み出された共同体としての民族の記憶の問題、そして教科書を通し子どもや児童文化へと流布させた教育の問題といった重要な諸問題を含み込んでいるということでもある。すなわち上述した東アジアに由来する民話教材について、単なる一教材の問題と見做すのではなく、日本を含み込んだ東アジアにおける、民話を利用した教育の有り様と在り方について、その背景に存在する様々なコンテクストを含み込んだ歴史的研究を、国語科教育研究の分野においても行うべきであるといえる。

(2)研究の目的

そこで、本研究では東アジアの民話教材を対象に〈教育文化史〉的視点からアプローチを行うことで、その背景に存在する様々な問題群を解明することを目的とする。具体的には、2018 年現在小学校国語科教科書に掲載されている東アジアの民話教材「三年とうげ」・「うさぎのさいば

ん」・「スーホの白い馬」について、通時的・共時的な観点から分析する。その上で明らかになった教材・作品の歴史的背景から見えてくる教育・文化・歴史に関する問題を検討し、東アジアの民話教材を利用した、教育の有り様と在り方について考察する。

(3)研究の方法

上述した研究の目的を達成するため、本研究において明らかにしたい諸課題を㋐～㋓に示した。

㋐〈教育文化史〉研究の必要性について実証すること
㋑それぞれの東アジアの民話教材について〈教育文化史〉を記述すること
㋒それぞれの東アジアの民話教材に内在する問題について明らかにすること
㋓東アジアの民話教材の特質について三事例を重ね合わせ検討すること

上述した諸課題を達成するため、以下に示す手順【図 1】を踏まえ、研究を進めていく。

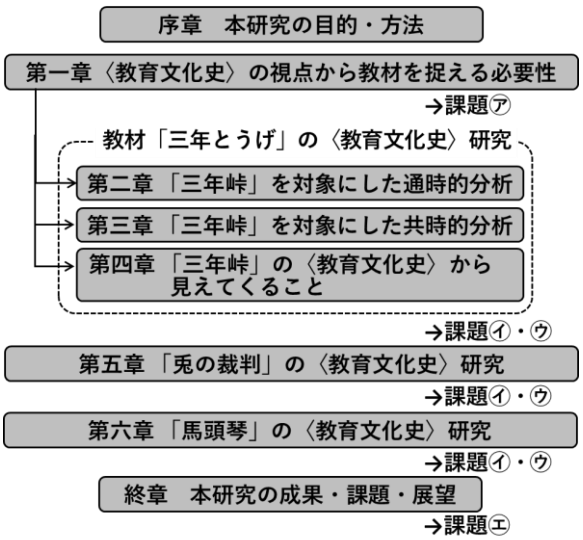
第一章では、教材を〈教育文化史〉的視点から捉えることの必要性について検証する(**課題㋐**)。

まず、教材「三年とうげ」について、国語科教育研究の内外からの先行研究を整理する。その上で国語科教育の場における教材の歴史的背景への視点の欠如によって国語科教育以外の場から論争が巻き起こされた事例である、教材「最後の授業」を取り上げる。教材の歴史的背景を捉えることの重要性について再確認し、では実際にどのようにすれば捉えることが可能なのかを、「教育文化史」という歴史叙述を用いた先行研究を取り上げ検討する。また「学校文化史」など類似する概念についても取り上げ、本研究における〈教育文化史〉の枠組みを仮設する。

第二章・第三章では、教材「三年とうげ」(「三年峠」)についての〈教育文化史〉を記述する(**課題㋑**)。まず第二章では通時的観点を用い、近世日本・植民地期朝鮮・戦後日本・戦後韓国における民話「三年峠」のヴァリアント(異本)の変遷を作品史として記述する。その上でいつかのヴァリアントを選出し、その変容について言語的側面に着目し、テキスト内部から緻密に捉えていく。第三章では、第二章から明らかになった、テキストが変容する際に要となっている「三年峠」のヴァリアントについて、共時的観点からその歴史的背景を分析していく。ヴァリアントの改作の要因について、研究分野を横断する形で、多角的な視点から明らかにする。

第四章では、民話「三年峠」の〈教育文化史〉から描き出されたことについて整理し、ヴァリアントの改作・継承の様相、またそこに携わった媒介者らについて検討する。その上で、東アジアの民話教材に内在する問題について「三年峠」の〈教育文化史〉から見えてきたことを踏まえ明らかにする(**課題㋒**)。

第五章・第六章では、教材「うさぎのさいばん」(「兎の裁判」)及び教材「スーホの白い馬」(「馬頭琴」)の〈教育文化史〉研究を行う。民話「三年峠」の〈教育文化史〉研究と同じく、共時的検討・通時的検討からヴァリアントの改作・継承の様相を描き出し、その要因を分析する。そして、東アジアの民話教材に内在する問題について、〈教育文化史〉から見



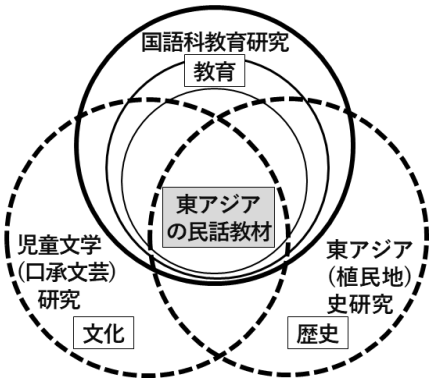
【図 1】本研究の構成および対応する課題

えてきたことを踏まえ明らかにする(**課題㋑・㋒**)。

終章では、「三年峠」・「兎の裁判」・「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究から見えてきた、東アジアの民話教材を巡る教育・文化・歴史に関する問題について、総合的な考察を加える(**課題㋓**)。その上で、本研究の成果と課題を明らかにし、今後の研究の方向性について示す。

(4)研究の位置・意義

本研究は、東アジアの民話教材の歴史的背景を明らかにするという点では国語科教科書教材史の一環として位置づけることが出来る。一方で、これまで述べてきたように本研究の目指すところは、狭義的な教材史研究に留まらず、東アジアを単位とした観点から対象を捉えるところにある。よって本研究は国語科教育研究、児童文学(口承文芸)研究、東アジア(植民地)史研究、これら三つの研究分野に跨った上に成り立つものであると考えられる【図 2】。そこで、近接領域における先行研究の課題について概観し、本研究の意義について述べる。



【図 2】本研究の位置

まず、国語科教育研究の分野では、民話教材の研究、国語科教科書教材の通時的・共時的研究、中国や韓国との比較国語科教育研究、などの研究の蓄積がある。一方で、これらを連携させ、民話教材を、東アジアの視点から、総合的に見ようとする研究は管見の限り見られない[8]。また、児童文学の分野では、口承文芸研究者を中心に民話について多くの研究が確認でき、また東アジアにおけるそれらのジャンルの研究についても進んでいる。しかし、これらの研究成果を、教育と関連付け、また東アジアの観点から捉えた研究は管見の限り見られない[9]。さらに、植民地史を含む、東アジア史研究の分野では、「国語」の概念を巡るイデオロギー性について、教育政策や教科書・人物などに焦点を当て、国語・国家・民族との関わりから解明を進める研究が行われている。これらの研究は比較的マクロな視点から行われており、実際にどのような内実であったのか、ミクロな視点が不足している[10]。

本研究の意義の一つは、こうした各研究分野の実績と課題を踏まえ、東アジアの民話教材を主軸とした〈教育文化史〉の叙述を行うことで解決を図る点である。見出される教材・作品の歴史的背景から見えてくる問題を、東アジアの教育・文化・歴史に関する問題と結び付けて捉える視点はこれまでの研究では希薄であり、あくまで個別事例の検討といった狭義的な枠組みに留まっている。東アジアの民話教材が、民族に関する共同体の記憶の槽、すなわち東アジアに関する言説を生み出す装置であることを本研究から明らかにしていく。

Ⅲ.各章の概要

第一章 〈教育文化史〉の視点から教材を捉える必要性

本章では、国語科教科書に掲載された教材を対象にした研究において、〈教育文化史〉の視点を用いることの必要性について具体的事例から述べた。

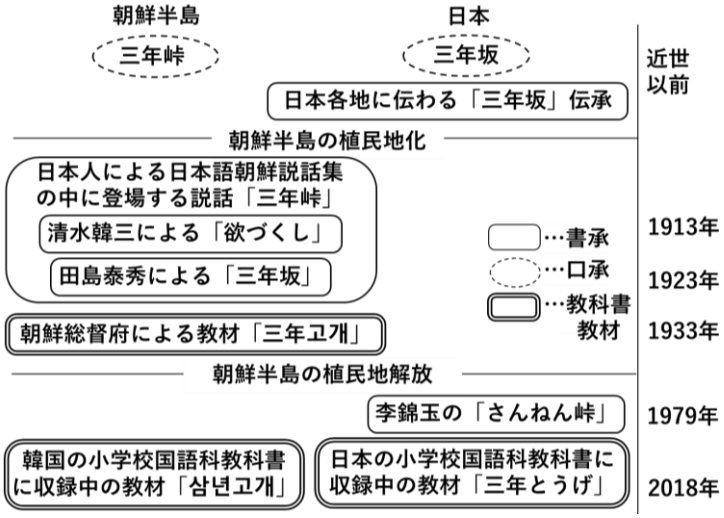
第一節では、具体的事例として取り上げる教材「三年とうげ」について、国語科教育の場における扱われ方や位置について、2018 年現在使用されている教材「三年とうげ」の単元内容や指

導書から確認・整理を行った。実際の指導内容は実践者に委ねられているが、現在使用されている教材「三年とうげ」は、朝鮮半島由来の民話であり、特定の国・地域の暮らしや文化、すなわちここでは朝鮮半島の民族性を表象する媒体であることが、教科書や学習指導書を使用する限り抜き難いものになっていることが判明した。

第二節では、国語科教育以外の場において展開されてきた「三年峠」の議論を取り上げ、その背景に存在する様々な問題群について検討した。国語科教育研究以外の場における先行研究において、教材「三年とうげ」はその歴史を遡れば遡るほど、一概に韓国・朝鮮の民話とは言い難い複雑な背景が存在することが指摘されていた。具体的には次の通りである。千恵淑は民話「三年峠」について、朝鮮半島で初めてテキスト化された媒体が、総督府の日本人文官である田島泰秀によって編纂された笑話集『温突夜話』であったことを指摘し、京都に伝わる「三年坂」伝説との類似から、日本に「三年峠」の源流があるのではないかという見解を示した[11]。三ツ井崇は、植民地期および解放後に「三年峠」が教材採録されたことから、韓国での「三年峠」の流布のきっかけは朝鮮総督府編纂『普通學校朝鮮語讀本』によるものだと推察した[12]。さらに、日本の教材「三年とうげ」が在日朝鮮人児童文学作家によって教材化された文脈について検討し、日本の国語科教育研究の場において教材「三年とうげ」の持つ歴史性が、十分に議論がなされてこなかったことを指摘した[13]。金広植は 1913 年に雑誌『少年世界』に掲載された清水韓山の「慾づくし」を取り上げ、新たな資料の存在と、「三年峠」の源流に対する再検討の必要性を提示した[14]。以上、**【図 3】**に示した「三年峠」の歴史的変遷が、教材「三年とうげ」の背景に存在していることが明らかになった。

こういった国語科教育研究以外の研究の場で行われている「三年峠」をめぐる先行研究では、この作品が、単純に朝鮮半島の民話であるとはいえないことが明らかになった。また、「三年峠」が、日本による朝鮮植民地支配のための道具として、日本から持ち込まれた可能性まで言及されている。第三節では、様々な領域に跨る問題提起の材料を抱えており、また植民地支配の問題と関わるという点で共通している教材「最後の授業」の事例を取り上げ、教材の歴史的背景への視点の欠如が何を引き起こすのかについて分析した。その上で、教材「三年とうげ」における国語科教育内・外における問題を広い場所に出して検討するために〈教育文化史〉という枠組みを構築した。〈教育文化史〉の具体的な方法について、「三年峠」を対象にした場合どのように展開されるのか、先行研究の課題に触れつつ以下に示す。

まず、先行研究には「三年峠」全体を貫く通時的観点が不足しているという課題がある。これまで、異なる分野の研究者が各時代・地域の「三年峠」のヴァリアントを掘り下げ考察しているため、過去から現在に至るまでどのような「三年峠」のヴァリアントが登場したのか、作品史の全体像を把握しにくいという現状がある。そ



【図 3】先行研究で明らかになった「三年峠」の歴史的変遷

こで、先行研究で取り上げられなかった資料を取り上げつつ、「三年峠」の全体像を描き出す必要がある。また、各時代・場所のヴァリアントが相互に影響し合ったか、そして日本の教材「三年とうげ」がどのヴァリアントから影響を受けているかについて、資料の有無や作者の来歴・時代相など、状況的側面からの推察に留まるものが多く見られている。そこで、「三年峠」の言語的側面、すなわちテクストの形態に着目し、テクストの変容を緻密に捉えていく必要がある。「三年峠」にどのような記述が存在し、テクストの変遷と共に付加および削除されたかを捉えることにより、その背景に存在する時代相や教育意図が「動かぬ証拠」として顕著に表れると考えられる。以上のような先行研究の不足を補うために、「三年峠」の作品史の整理やテクスト形態の分析を、通時的観点から行う必要がある。

次に、先行研究における共時的観点には不十分さが見られる点に課題がある。「三年峠」を取り巻くコンテクストについては、前述したように三ツ井によって明らかにされつつある。しかし、三ツ井が中心に取り上げているのは教材「三年고개（三年峠：論者訳）」の背景に存在する植民地期朝鮮の朝鮮総督府の政策である。日本や韓国の教材についても触れられているが、その背景に存在するであろう、日本の「三年坂」が所収されている名所記や噺本、日本人による日本語朝鮮説話集、戦後韓国の絵本等メディア、在日朝鮮人児童文学など、教材の原典となった作品についての詳細な検討はなされていない。同時代の中で、それぞれの「三年峠」のヴァリアントが、どのようなメディアに位置づき、そしてどのような読み手が想定されていたかを、共時的観点から明らかにしていく必要がある。また、前掲のように先行研究は口承文学、民俗学、歴史学などの国語科教育の場以外から行われており、「三年峠」が教材としてどのような役割を果たし読まれていったのか、といった視点については希薄である。これまで確認してきように、「三年峠」が先行研究において取り上げられ、議論の場に引き出されるのは、「三年峠」の教材化が繰り返されたという点が影響している。しかし、その所収の教科書に対する分析や、教材はどのように位置づけられ、学習者に読みを広げていったかについては、十分に把握されているとは言い難い。「三年峠」の内・外に存在する様々な問題群を探究するためには、「三年峠」を、その背景に存在する「文化」との相関の中で捉えていく、共時的観点の設定が有効であると考えられる。

そこで、上述した通時的観点・共時的観点を持ち合わせた〈教育文化史〉の枠組みから「三年峠」を再検討する。その具体的な手順については以下の通りである。

①「三年峠」の通時的分析：マクロ・ミクロ的視点の双方から

「三年峠」のヴァリアント群について、マクロ・ミクロ的視点の双方から通時的分析を行う。マクロ的視点による通時的分析の方法として、先行研究で取り上げられなかった資料等も含め、全体像を見通すことのできる作品史を記述する。ミクロ的視点として、作品史を踏まえヴァリアントの影響関係や派生状況を、テクストの形態に着目し分析を行う。

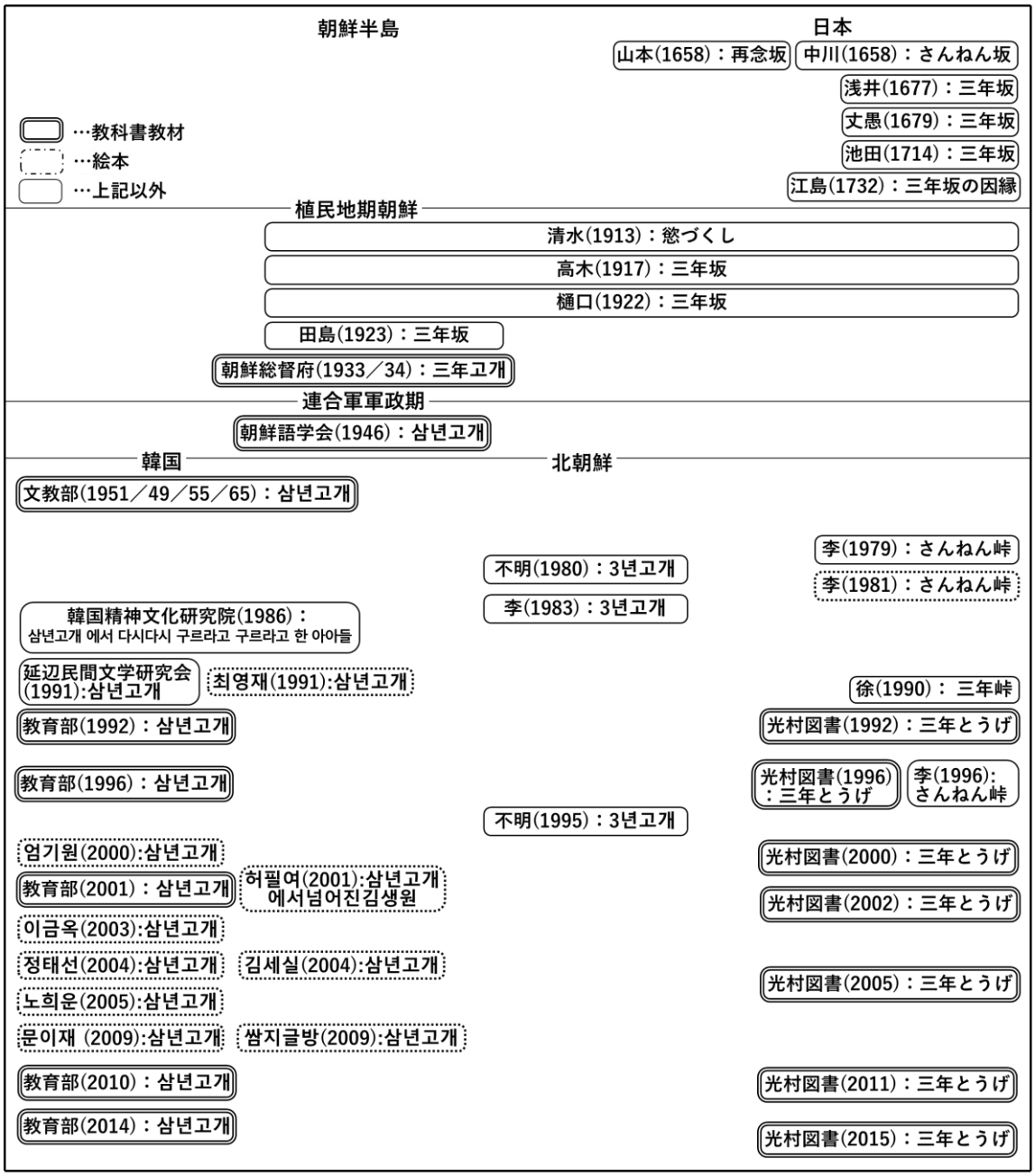
②「三年峠」の共時的分析：近世日本・植民地期朝鮮・戦後の朝鮮半島および日本から

①で明らかになった「三年峠」の通時的な文脈および影響関係を踏まえた上で、変遷の鍵となるヴァリアントを中心に、共時的観点から「三年峠」の内・外に存在する問題群を明らかにする。「三年峠」の教材化がそれぞれの時代の中でどのような意味をもっていたのか、影響関係のあるヴァリアントを含め、教育・文化・歴史との相関の中で考察を加えていく。

第二章 「三年峠」を対象にした通時的分析

本章では、マクロ・ミクロ的視点による通時的分析を行い、〈教育文化史〉のうち〈史〉の部分の記述を行った。

第一節では、マクロ的視点による通時的分析の方法として全体像を見通すことのできる作品の変遷史を記述した。「三年峠」の作品史の概観は【図 4】の通りである。【図 4】から、時代・場所を越え、「三年峠」のヴァリアントが登場していたことがわかる。民話「三年峠」が初めて文字化された段階においては日本を中心に登場していたが、それが徐々に舞台を朝鮮半島に移し、教材化にまで至っている。戦後は、朝鮮半島では、戦後直後から 1990 年代までは教科書教材を中心に、その後絵本にも派生し多くのヴァリアントが登場している。一方で、日本では李錦玉の手によってヴァリアントを中心に登場し、またそれは北朝鮮へと派生していることが判明した。



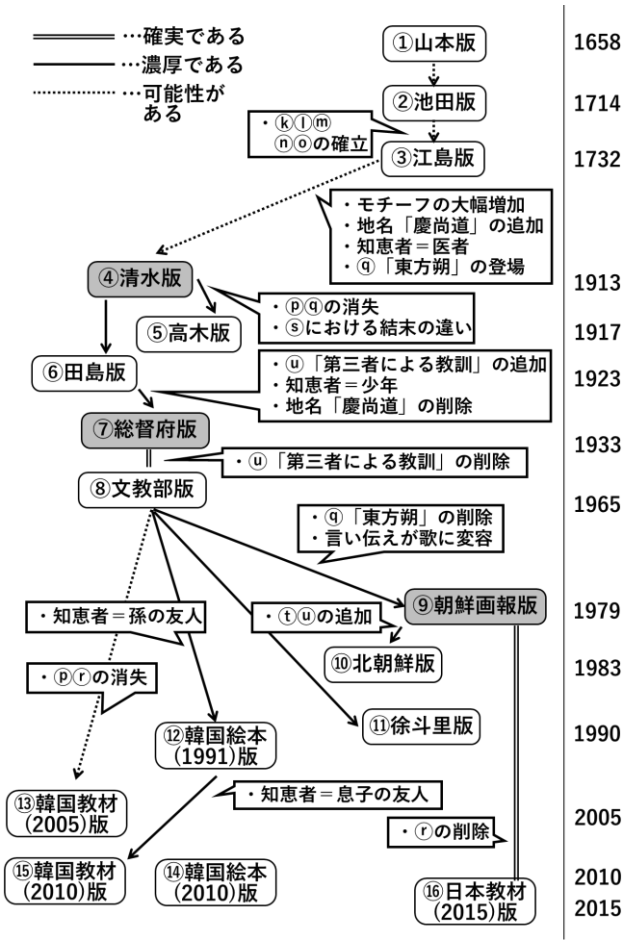
【図 4】「三年峠」ヴァリアントの変遷図

第二節におけるヴァリアントの言語的側面に着目したミクロ的視点からの通時的分析では、崔仁鶴の「構造分析方法」を用い[15]「三年峠」の改作／継承の様相について、詳細な分析を加えた。まず【図 4】から分析対象とするヴァリアントを選出し、「三年峠」のモチーフの有無について明らかにした【図 5】。さらに、モチーフ毎の記述内容についても分析を加えた。

【図 5】「三年峠」のヴァリアント毎のモチーフ変遷表

挿話	Ⓐ				Ⓑ				Ⓒ							Ⓓ					
モチーフ	ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ	ⓕ	ⓖ	ⓗ	ⓘ	ⓙ	ⓚ	ⓛ	ⓜ	ⓝ	ⓞ	ⓟ	ⓠ	ⓡ	ⓢ	ⓣ	ⓤ
①山本版	■																				
②池田版	■		■		■	■															
③江島版	■		■			■					■	■	■	■	■						
④清水版	■		■	■	■	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■				
⑤高木版	■	■	■	■	■	■			■	■	■	■	■	■	■	■			■		
⑥田島版	■	■	■	■		■			■	■	■	■	■	■	■	■	■				
⑦総督府版	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		■
⑧文教部版	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
⑨朝鮮画報版	■	■	■	■		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
⑩北朝鮮版	■	■	■	■		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
⑪徐斗里版	■	■	■		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
⑫韓国絵本(1991)版	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
⑬韓国教材(2005)版	■		■	■		■		■	■	■	■	■	■	■	■	■			■		
⑭韓国絵本(2010)版	■		■	■	■	■	■		■			■	■	■	■				■	■	
⑮韓国教材(2010)版	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■			■		
⑯日本教材(2015)版	■	■	■	■		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		■		

第三節では、これまでの通時的分析を踏まえ、「三年峠」の影響関係図【図 6】を踏まえた考察を加えた。以下、④清水版(＝清水韓山(1913)「慾づくし」)、⑦総督府版(＝朝鮮総督府(1933)「三年고개」)、⑨朝鮮画報版(＝李錦玉(1979)「さんねん峠」)を中心に、変遷課程の考察を行う。まず、④清水版は、⑤高木版・⑥田島版と影響関係が濃厚であり、間接的に⑦総督府版に影響を与えていることがわかる。④清水版は、朝鮮半島の民話としての「三年峠」が、文字資料として登場したということもあり、後に登場する植民地期朝鮮におけるヴァリアントに影響を与えたと言える。次に⑦総督府版・⑧文教部版である。⑦総督府版と⑧文教部版は、ほぼ同一の記述内容を有しており、⑧文教部版は、1946 年から 1973 年の長期にわたって使用されている。その影響もあり、戦後の日本・韓国におけるヴァリアントの多くが⑦総督府版・⑧文教部版のモチーフを踏襲している。そして、⑨朝鮮画報版である。⑨朝鮮画報版の作者である李錦玉は、北朝鮮を含む幅広い範囲で「三年峠」を手掛けている。教材「三年とうげ」はこのような歴史的変遷の中で形成されたということを、本章から明らかにすることができた。



【図 6】「三年峠」のヴァリアントの影響関係図

第三章 「三年峠」を対象にした共時的分析

本章では、「三年峠」の通時的分析を踏まえて明らかになった、ヴァリアント同士の影響関係を踏まえ、共時的観点から検討を進めた。前章までにおいて、「三年峠」の改作の鍵となるいくつかのヴァリアントを抽出することができた。本章では、それらのヴァリアントを中心に、ヴァリアントを取り巻くコンテクストについて検討を加えていった。

第一節では、清水韓三による「慾づくし」から朝鮮総督府による「三年고개」に至るまでに、どのような素材の橋渡しが展開されたのか、植民地期朝鮮における「三年峠」の登場・継承の背景を明らかにしていった。朝鮮半島の民話としての「三年峠」のヴァリアントは、少年雑誌『少年世界』に掲載されたことから出発した。初めは「三年峠」は、読者である子ども達に、朝鮮の民俗を紹介する試みの一端として、「朝鮮のお伽噺」に位置づけられていた。一方で、日清戦争後に登場した『少年世界』における朝鮮観は、日本領土の一部であり支配するべき対象であるというオリエンタリズム的な発想に基づいていることが判明した。すなわち、朝鮮半島の民話の掲載は、表面上は朝鮮半島の民俗を「朝鮮のお伽噺」として子ども達に紹介するという名目であるが、その背景には占領国と被占領国の関係性が深く影響しているということが明らかになった。その後、高木によって「慾尽くし」は「三年坂」と名前を変え、「教育昔噺」としての意味づけが行われた。そして田島泰秀は、初めて朝鮮半島で「三年坂」を紹介し、「朝鮮民族の研究資料」として「三年峠」を広く紹介するに至った。

続く第二節では、教材「三年고개」と田島泰秀による「三年坂」との関係性について実証したのち、所収の教科書『普通学校朝鮮語読本』における位置を確認した。その上で、教材「三年고개」と、植民地教育の関わりについて、同時代の教育状況を踏まえつつ明らかにしていった。田島による日本語朝鮮説話集『温突夜話』の序文は、小倉進平・玄櫶が担当していた。両者共に教材「三年고개」の掲載されていた『普通学校朝鮮語読本』と深く関わっている人物である。小倉は教科書編纂に際して教材の選出に苦労していた[16]中で、自身が序文を務めた『温突夜話』の中から「三年坂」を発見し、教材として取り入れたことが推察できる。一方で、田島の「三年坂」を、そのまま掲載することはせず、「第三者による教訓」を始めとするモチーフの付加や知恵者が医者から少年に変わるなどの改作が加えられた。現時点では、その改作を加えた人物については、はっきりと明記することはできないが、小倉進平、玄櫶、田島泰秀のいずれかによるものであると考えられる。教材「三年고개」は、修身的教材として『朝鮮語読本:巻四』に登場した。編纂趣意などを確認すると内鮮融和の思潮が第三期改訂時の教科書には流れており、教材「三年고개」もその文脈に収束していく。「三年坂」から「三年고개」への変容には、当時の植民地政策の影響が存在していたといえる。例えば、教材化の差異に医者から挿げ替えられた少年は日本人、老人は朝鮮人、というメタファーとして十分に考えられる。また、迷信に惑わされる未開性の象徴ともいえる老人(＝朝鮮人)は、迷信を見事に打破した文明人としての少年(＝日本人)を見習い、「迷信に惑わされることは、文明人としてこの上なく恥ずかしいこと」[17]を自覚するのである。このような仕掛けが、「三年坂」から「三年고개」の変容には隠されており、まさに内鮮融和を意識した改作といえるのである。そして教材「三年고개」を通して、朝鮮人児童にはその内側から植民地政策の思想にのっとった教育が施されたのである。

第三節では、「三年峠」の教材化が行われた戦後韓国を中心に共時的観点から分析を行った。戦後韓国では、教材「삼년고개(三年峠:論者訳)」を巡り、大きく二つの時期に区分すること

ができる。教材「三年고개」が継承された 1946 年から 1973 年に至るまでと、教材「三年고개」が多様化した 1992 年から 2018 年現在までである。前半期においては、朝鮮総督府によって付け加えられたモチーフⓤ「第三者による教訓」**【図 5】**の削除を除き、ほぼ同じ教材内容で約 30 年間戦後韓国の国定小学校国語科教科書において教材「삼년고개」が掲載され続けていた。その背景には、登場当時は教科書編集の体制がまだ整っておらず、解放前の『普通学校朝鮮語読本』から日本に関係したところを除いて急場をしのぐ形で作られたこと、そしてわざわざ別の教材に変更せずとも十分に教育に利用できる価値があると判断されたことから推察される。それは、「삼년고개」が自国の民話であることが受け入れられているからであり、また作中に見られる孝子譚や迷信打破の教訓が教材として適していると見做されたからであると考えられる。日本人の手によって改作された教材「三年고개」は、戦前は 1933 年から 1938 年まで、戦後は 1946 年から 1973 年まで、かなり長期において国定教科書という媒体に掲載されていたことになる。すなわち、幅広い年代層の国民が触れたということになり、その後のヴァリアントに影響を齎した原因であるといえる。

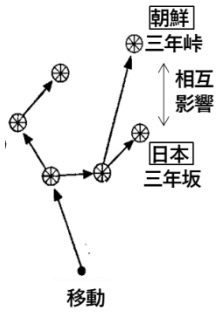
一方の後半期は、教科書改訂毎に教材「삼년고개」の内容が変えられており、音読教材・漫画教材・物語教材等、多様化していることが判明した。韓国において教材「삼년고개」が多様化した背景には、同時代の絵本「삼년고개」が多様に展開されたことが影響している。教科書における教材「삼년고개」からアイデアを得た、もしく学んだ作者が絵本を手掛け、一方で絵本や民話集などを原典や参考にしつつ教科書教材が作成された、という相互関係の中で、韓国の「三年峠」は、教科書・絵本ともに多様化していったものと考えられる。教育と文化の関わり合いの様相について、戦後韓国の「三年峠」の共時的分析から捉えることができた。

第四節では、日本における「三年峠」について共時的観点から検討を加えた。本節では特に、ヴァリアントの影響関係の中で大きな存在感を放っていた李錦玉を中心に、その周辺に存在する教育文化の様相を探っていった。李の「三年峠」が登場する、在日朝鮮人向け機関誌『朝鮮画報』における「さんねん峠」、岩崎書店の絵本『さんねん峠』、そして北朝鮮における児童向け雑誌『아동문학(児童文学:論者訳)』における「3 년고개(三年峠:論者訳)」、それぞれの登場の背景と、内容の差異を比較し、李の「三年峠」が異なる場・読み手によって様々な顔を持つことを明らかにした。その上で、李の朝鮮半島の民話の再話創作の背景に焦点を当て、なぜ彼女が「三年峠」を手掛けたのかを分析した。在日朝鮮人である李は、両国の文化の媒介者になりたいという願いから、朝鮮半島の民話の再話創作を手掛けたことが判明した。しかし「自分の国の民話については、聞くチャンスも少なかったですし、聞いたのも極僅かにしか記憶に残っていない」李は、民話の再話創作を手がけるにあたり、その素材を“資料”や“人”から得ようとした[18]。その素材の出自については、これまでの「三年峠」の通時的分析からも明らかであるように、『少年世界』において日本と朝鮮というオリエンタリズム的な関係性の中で生み出された「慾尽くし」、またそれを内鮮融和の思想を抱え修身的教材として改作された教材「三年고개」である。すなわち、李が創作過程において参考にした素材というのは、植民地期朝鮮に日本人によって少なからず手が加えられたものだったのである。そして、植民地期朝鮮で教材化された「三年峠」は巡り巡って日本で再び教材化されることになったのである。それぞれの時代において、一方は内鮮融和、一方は両国の相互理解という、全く方向性の異なる目的を有しつつ、朝鮮半島の民族・文化理解という共通項を見ることができた。

第四章 「三年峠」の〈教育文化史〉から見えてくること

第四章では、第二・三章で展開した「三年峠」の〈教育文化史〉を通して明らかになったことについて総合考察を加えた。

第一節では、「三年峠」の口承での伝達経路に関する考察を行った。これまでの民話の経路についての先行研究を踏まえ、「三年峠」の口承では、【図 7】のような伝播経路があると考察した。別の地域(印度・中国他)において存在していた「三年峠」の素が、日本または朝鮮半島に渡り、相互影響を与えながら発展していったものと考えられる。

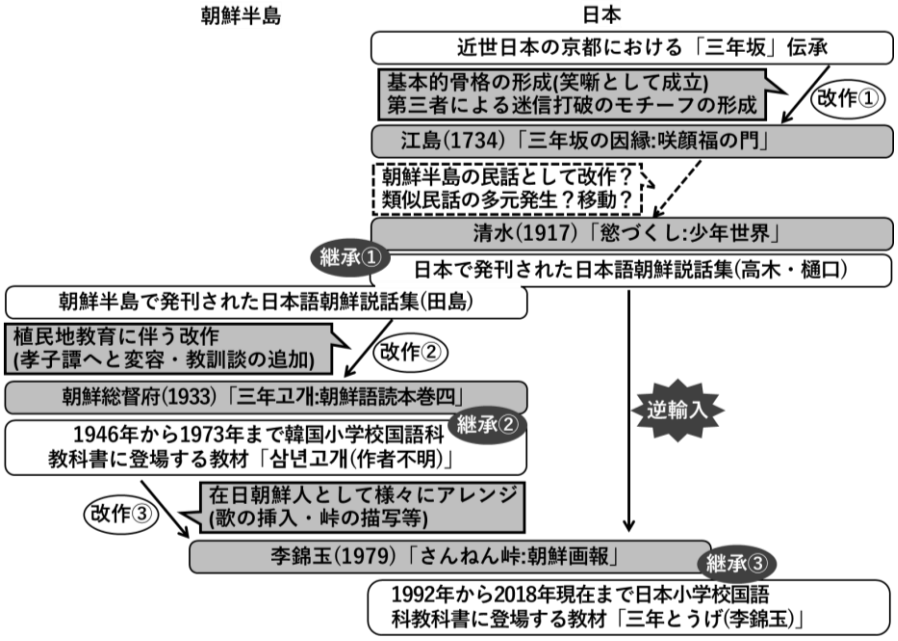


【図 7】「三年峠」の口承段階の伝播経路図

そして第二節では、口承から書承へと移行していく段階において何が生じてしまったのか、次に改作と継承を巡る様相について考察を加えた。

これまでの検討によって大幅な改作が加えられたヴァリアントは、江島其磧の「三年坂の因縁」・清水韓山の「慾づくし」・朝鮮総督府の「三年고개」・李錦玉の「さんねん峠」であることが判明した。そしてこれらの影響を受けたヴァリアントを【図 8】にまとめ、考察を加えた。

第三節では、「三年峠」で明らかになったことについて民話(文化的考察)／教材(教育的考察)／東アジア(歴史的考察)という観点から整理した。文化的考察においては、民話「三年峠」はモチーフの変容が作者によって容易であるため、時代に合わせてその主題を変容しやすいものであったことが判明した。「三年峠」の可変性によって、媒介者たちが改作、継承の連鎖を引き起こしていったのではないかと考えられる。そして、民話を「筆による再話」するという行為により内容を作り変えてしまうことを当たり前だとする風潮があったことが明らかになった。すなわち、再話という行為が許容され、かつモチーフを変容しやすい「三年峠」は、改作と継承の連鎖を経て、知名度を高めたということができる。教育的考察においては、再話の繰り返しにより知名度の高まった「三年峠」が教育に利用されることの功罪について検討した。植民地期朝鮮当時、数少ない朝鮮語教材、そして自分たちの民話を素材にした教材であった「三年고개」が、読み手である学習者や教師の「記憶」に与える影響は我々の想像以上に大きいものであったと考えられる。「三年峠」の、朝鮮半島の民話としての地位を高めたのは、この植民地期朝鮮における教材化であったといえる。韓国や日本で教材「三年고개」が、再び教材とし



【図 8】日本の小学校国語科教科書に至るまでの「三年峠」の改作・継承の様相

て登場したのは決して偶然ではなく、植民地期朝鮮における教材化の影響を受けた結果であるということが判明した。歴史的考察においては、東アジア文化圏の歴史と「三年峠」の生成とどのように関係しているのかについて分析した。東アジア文化圏での様々な交わりあいが「三年峠」の複雑な歴史性を生み出し、また日本と朝鮮半島を巡る複雑な歴史性が「三年峠」を生み出したといえ、現在の我々が目にする教材「三年とうげ」は、1910 年以降の帝国日本の植民地化の一産物と見做すことができる。また、「三年峠」に様々な形で触れた人々の複数の「記憶」の集合体であるということを明らかにした。「三年峠」生成の背景には、媒介者たちによる個人の「記憶」や、集団の「記憶」が影響していることが判明した。そして、2018 年現在も使用されている教材「三年とうげ」を通し、再び人々の中の「記憶」に残り続けていく可能性について示唆した。そして、これらの考察の結果を踏まえ、残す二つの東アジアの民話教材に関しても、〈教育文化史〉の視点から考察することの意義について提示した。

第五章 「兎の裁判」の〈教育文化史〉研究

第六章では、「兎の裁判」について「三年峠」と同様の手順を踏み〈教育文化史〉研究を展開した。

第一節では、「兎の裁判」を対象にした〈教育文化史〉をどのように展開していくべきか、そして〈教育文化史〉を通して何を明らかにしていくべきかについて論じた。教材「うさぎのさいばん」は 2018 年現在使用されている小学校国語科教科書に掲載中の、朝鮮半島の民話教材である。また指導書においては、教材「うさぎのさいばん」が朝鮮半島において「権力者に苦しんだ民衆が、権力者を虎、自分たちを兎になぞらえて語り継いできた」[19]という認識が前提とされていることが判明した。しかしながら、論者の調査により、この教材「うさぎのさいばん」についても、植民地期朝鮮において教材化が既になされていたことが判明した。具体的には 1923 年に発刊された朝鮮総督府編纂『普通学校国語読本』の巻六に登場する教材「恩知らずの虎」、1930 年に発刊された『普通学校朝鮮語読本』の巻一に登場する教材「(은혜 모르는 호랑이)(恩知らずの虎：論者訳)」[20]である。さらに 2018 年現在の韓国における国定小学校国語科教科書においても教材「토끼의 재판(兎の裁判：論者訳)」が登場していることが判明した。これらの教材がヴァリアント関係にあることを実証した上で、複雑な歴史的背景を有して居る可能性のある「兎の裁判」について、検討すべき項目を次の三つに設定した。

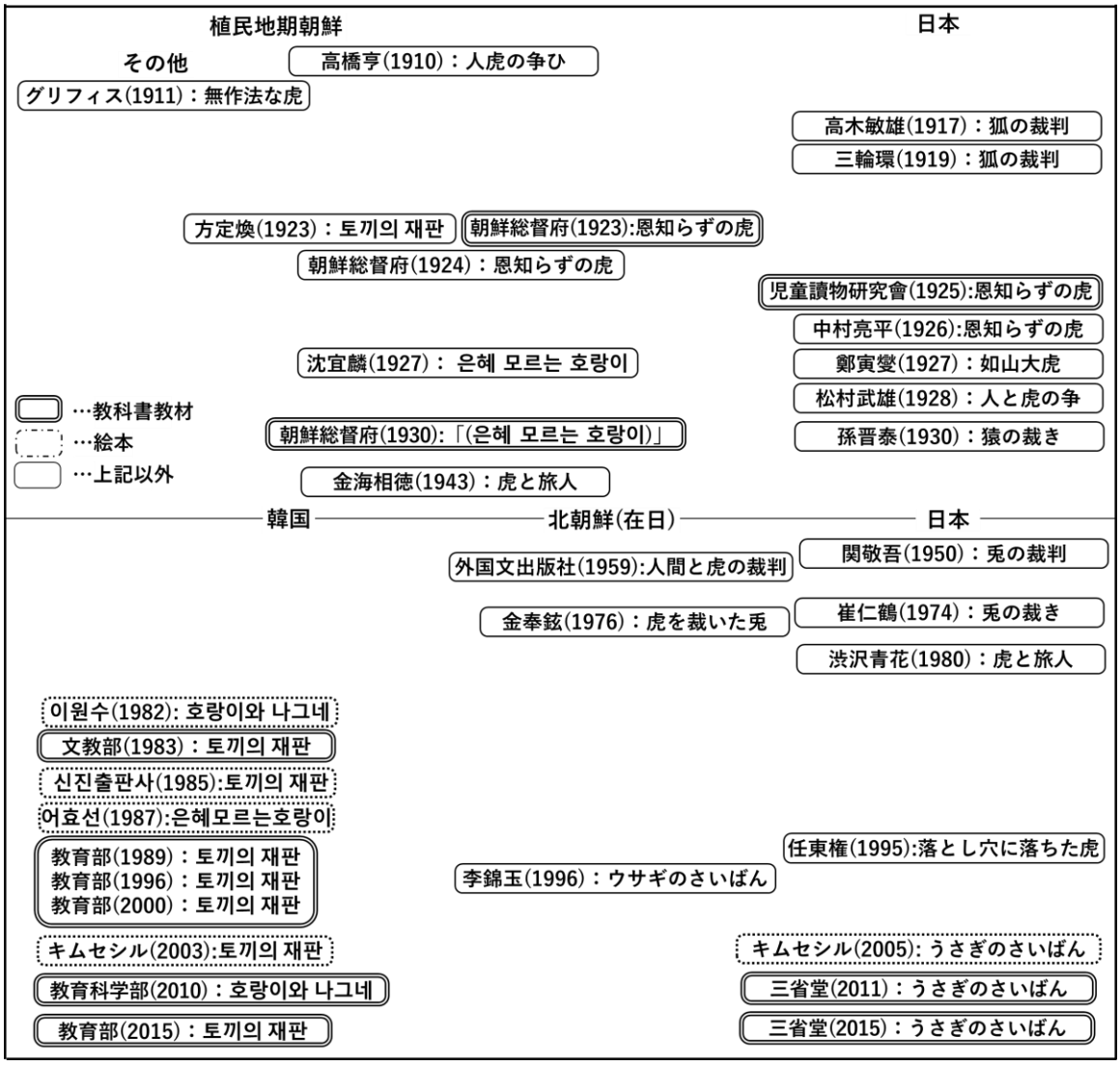
①日本の小学校国語科教科書における教材「うさぎのさいばん」の位相の検討
②植民地期朝鮮の教材「恩知らずの虎」と「(은혜 모르는 호랑이)」の検討
③教材「うさぎのさいばん」に至るまでの媒介者・媒介物の変遷様相の検討

続く第二節においては、上述した検討項目を明らかにしていくために、まず通時的観点からの検討を行った。

「三年峠」の〈教育文化史〉研究と手順を同じく、まずマクロ的視点として作品史を整理した。「兎の裁判」は古くから広い地域に類型民話が多数存在するため、朝鮮半島の民話であるとヴァリアント中に明記してあり、かつ**【表 1】**に示した行為者の機能を有し、変数 X が虎であるものに限り作品史を記述した。また戦後はヴァリアント数が増大したため、教材に影響を与えたものや古いものを中心に取り上げた。「兎の裁判」の作品史は**【図 9】**の通りである。

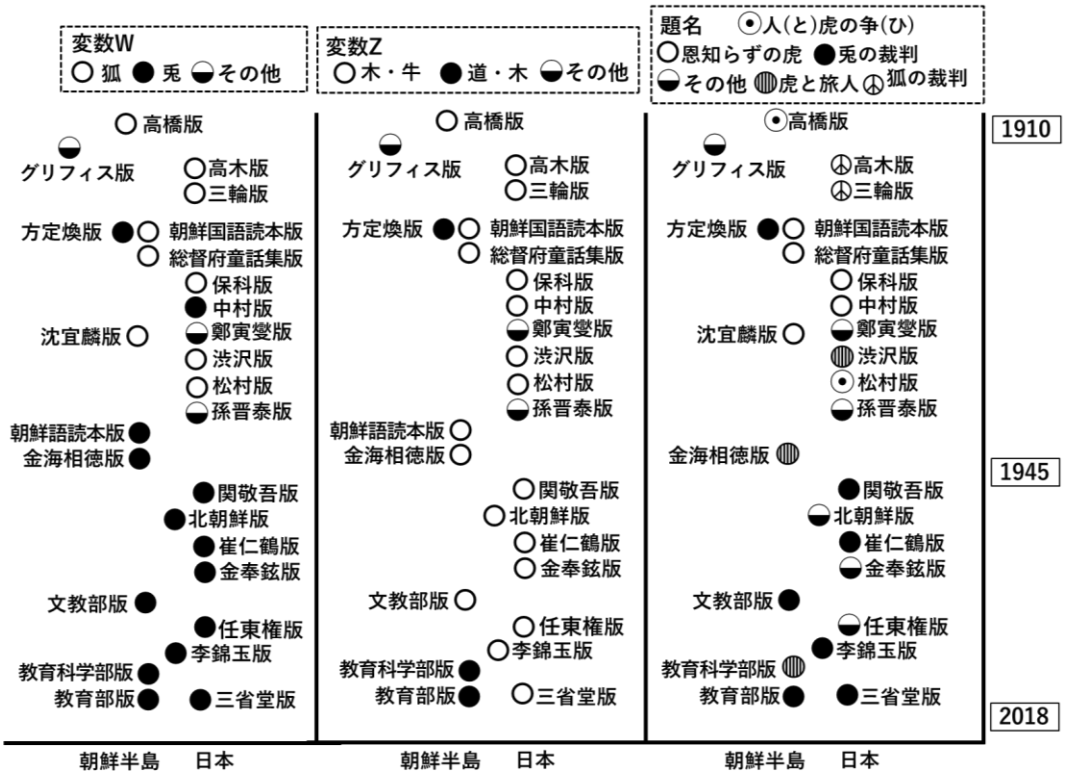
【表 1】「兎の裁判」における行為者の機能及び変数

Xが罠にかかる
XがYに助けを求める
YがXを救う
XがYを襲う
Yが裁判を要求する
ZがXの味方をする
Wが登場しXに元の現場を見せるよう要求する
Wが最終審判を下す



【図 9】「兎の裁判」のヴァリアントの変遷図

次にミクロ的視点として【図 9】から選出したヴァリアントにおける【表 1】に示した変数の変容を分析した。特に差異の見られた変数 W・Z・題名について取り上げ派生図を作成し【図 10】、鍵となるヴァリアントを検討した。派生図から、民話「兎の裁判」のヴァリアントは、物語構造としては連続性を持ちながらも、変数 W や題名に着目すると不連続性を見て取ることができる。さらに、その不連続性の生じている境目は、ある時点を境に明確に表れている。それは朝鮮語読本版、金海相徳版、関敬吾版のヴァリアントの周辺、すなわち太平洋戦争終結にあたる 1945 年前後である。これを境に題名は「兎の裁判」へ変わり、変数 W は「狐」から「兎」へと変容していることが【図 10】から見て取ることができる。また変数 Z については、特定のヴァリアントのみ特殊な変数を有していることがわかる。その特定のヴァリアントといえる方定煥の影響は、特に韓国の小学校国定国語科教科書群において受け継がれているということも判明した。また、植民地期朝鮮の教材「恩知らずの虎」は、1923 年以降から太平洋戦争終結に至るまでに登場した日本人によるヴァリアントに影響を与えたこともから伺うことができる。つまり連続性の中に、ある項目においてのみ断絶が存在するという特殊な派生状況の中で、民話「兎の裁判」の教材化が行われたということが明らかになった。

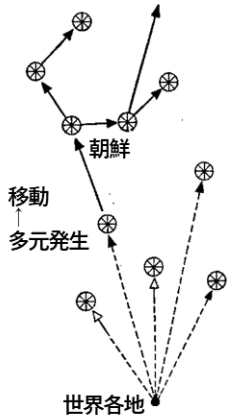


【図 10】変数 W・Z・題名に着目した民話「兎の裁判」の派生図

これを踏まえ民話「兎の裁判」のヴァリアントの派生状況について明らかになったことを以下に三点示し、続く共時的分析における観点を以下に定めた。

①初期のヴァリアントにおける変数 W=「狐」の配置
②植民地期朝鮮における二度にわたる教材化とその差異
③植民地期朝鮮の二つの教材「恩知らずの虎(은혜 모르는 호랑이)」の断絶・継承

第三節では、上述した観点を踏まえ「兎の裁判」の共時的分析を行った。まず世界に散見される類型民話を整理し、「兎の裁判」は各地で多元発生したもののうち、印度・西蔵・中国を経て朝鮮半島に移動した可能性について分析した【図 11】。その結果、最終裁判官である変数 W は「其地方の民間信仰として最も知識ある動物」[21]として様々な動物が登場していることが判明した。



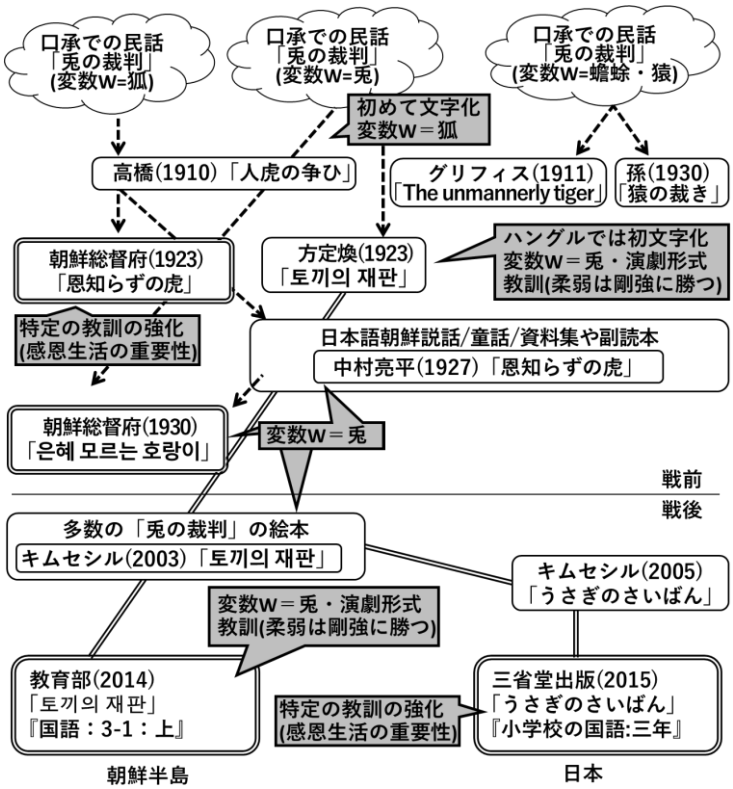
【図 11】「兎の裁判」の口承段階の伝播経路図

変数 W を狐に定めその後の固定化に影響を及ぼした高橋亨の「人虎の争ひ」及び三輪環・高木敏雄の「狐の裁判」登場の背景について探っていった。高木の資料については「意図的な改作の可能性」が示唆されており、変数 W を「狐」に敢えて当てはめた可能性が明らかになった。朝鮮総督府による教材「恩知らずの虎」の検討では、特に編集責任者であった芦田恵之助に焦点を当て、当時の読本編集の状況や芦田の朝鮮観を確認した。芦田は朝鮮半島の民話教材の採録数を大幅に増やしたが、一方で「内鮮融和」を積極的に推し進めるために教材を利用したことが明らかになった。また付属の趣意書や当時の教育雑誌における教材分析などから、教材「恩知らずの虎」を通して「感謝の心を失ふな、決して忘恩者になるな」[22]という教訓を強調し、朝鮮

人児童に「感恩生活の美しさ」を教え込もうとする教育内容が求められていたことが判明した。またその後、教材「恩知らずの虎」に代わり登場した朝鮮半島の民話教材「鵲の恩返し」についても取り上げ、二期にわたり「恩」をテーマにした教材を取り上げていたことを確認した[23]。関東大震災や3.1独立運動を経て朝鮮人(児童)に対し感謝の姿勢を植え付ける必要性を感じた朝鮮総督府が、その教化の道具として朝鮮半島の民話を教材化し利用したという文脈を見出すことができた。

続く教材「(은혜 모르는 호랑이)」では、変数Wが狐から兎へと変容したこと、また「感恩生活の美しさ」の教訓が教材「恩知らずの虎」ほど強調されていないことに着目し、「兎の裁判」は口伝えの段階では変数 W が「兎」の方が有名であり、教材「恩知らずの虎」に対する朝鮮人教員らからの反発があったのではないかと推察した。そして、植民地期朝鮮における 2 回の教材化の影響力は多大であり、それは日本の教材「うさぎのさいばん」にも及んでいることが判明した。日本の教材「うさぎのさいばん」では最終裁判官である変数 W は兎であるが虎のことを「恩知らず」と揶揄する表現が登場する。また、付属の指導書を参照すると、教材「恩知らずの虎」の教育内容の焼き直しとも捉えられるような解釈がなされていることが判明した。すなわち日本の小学校国語科教科書教材である「うさぎのさいばん」は、教材「恩知らずの虎」で強調された教訓「感謝の心を失ふな、決して忘恩者であるな」という思想を暗に引き継ぎ、学習者達に学びを拡げている可能性があるといえる。一方で、方定煥による「토끼의 재판」とそれをほぼ踏襲している韓国の国定小学校国語科教科書の教材群は、教材「恩知らずの虎」や「うさぎのさいばん」に見られる教訓は引き継いでおらず、兎の奇想天外さを強調し「柔弱は剛強に勝つ」という側面を押し出していることが判明した。植民地期朝鮮の教材「恩知らずの虎」の文脈を断絶した形で民話「兎の裁判」の教材化を行った韓国の国語科教育・その文脈を知らず知らずのうちに継承している日本の国語科教育、という二つの教材化の文脈を確認することができた。

第四節では、「兎の裁判」の改作／継承を巡る文脈を整理し【図 12】、明らかになったことについて、民話(文化的考察)／教材(教育的考察)／東アジア(歴史的考察)という観点から分析した。民話の可変性が変数Wや教訓の操作を可能とし、植民地教育の教材として利用され、後世の人々への「記憶」に大きな影響を及ぼした。一方で度々「記憶」の塗り替えも起こっており、【図 12】に見られる複雑な文脈を生み出したということが判明した。



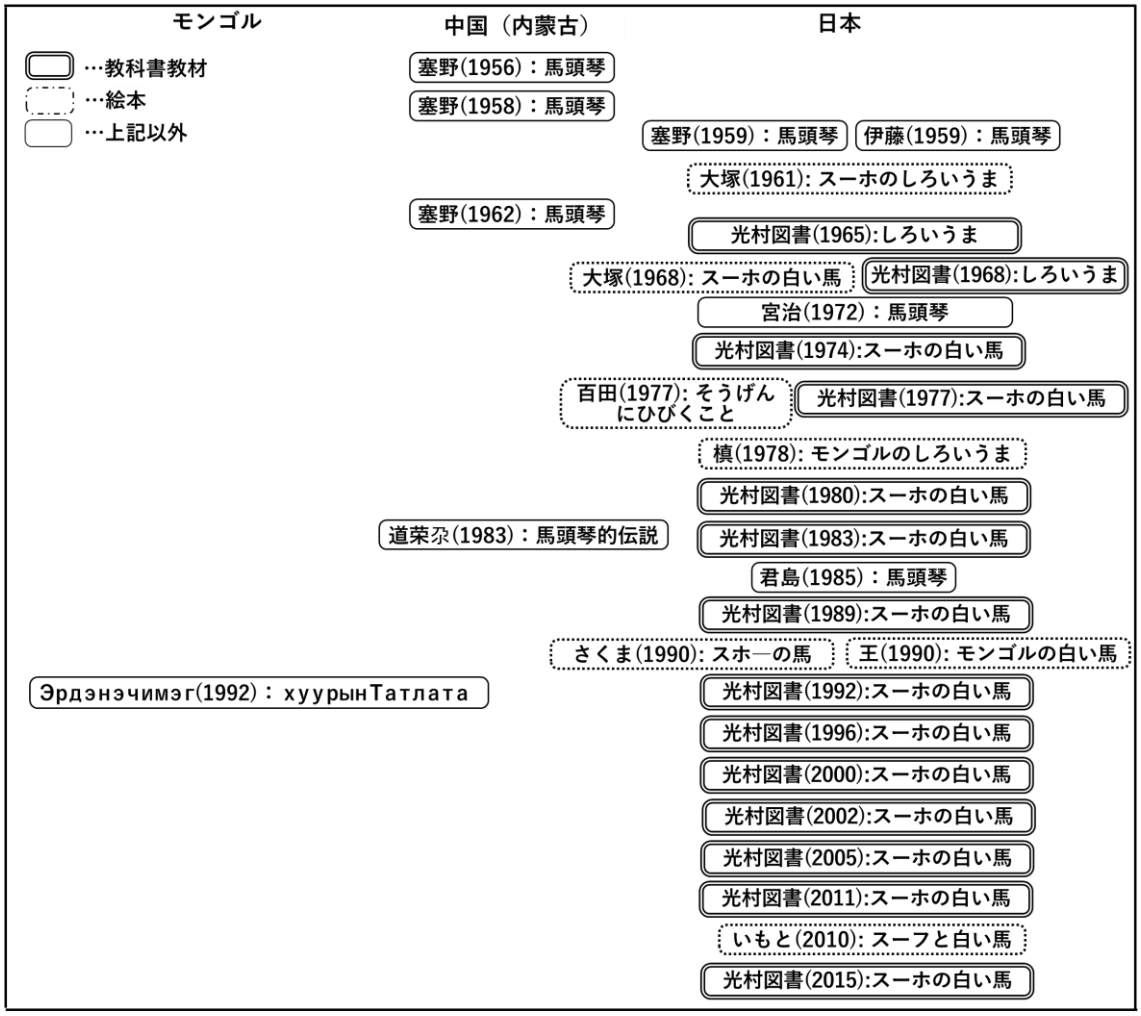
【図 12】日本の小学校国語科教科書に至るまでの
「兎の裁判」の改作・継承の様相

第六章 「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究

第六章では、「馬頭琴」について「三年峠」・「兎の裁判」と同様の手順を踏み〈教育文化史〉研究を展開した。

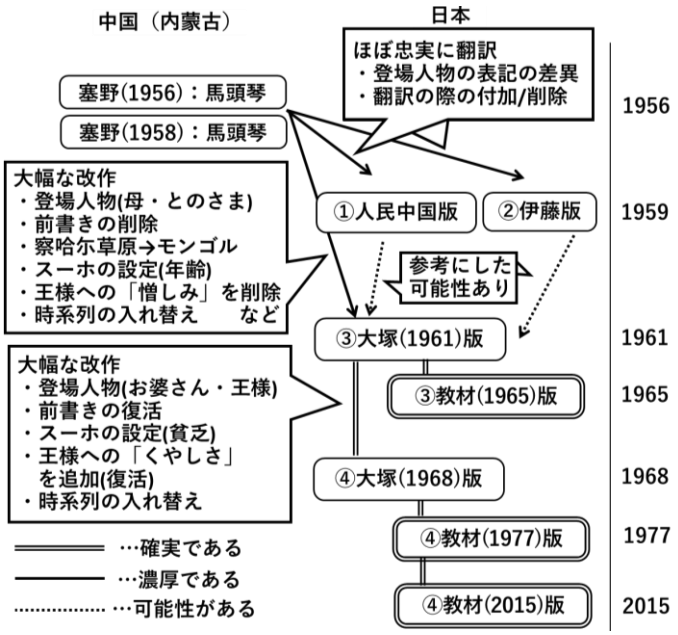
第一節では、「馬頭琴」を対象にした〈教育文化史〉をどのように展開していくべきか、そして〈教育文化史〉を通して何を明らかにしていくべきかについて論じた。教材「スーホの白い馬」は 2018 年現在使用されている『こくご二下:赤とんぼ』に登場するモンゴルの民話教材である。定番教材として 50 年近く登場し続けている、その一方で、先行研究においては本教材の歴史性を巡り「本当にモンゴルの民話なのか」という疑問が提示されている。日本の小学校国語科教科書教材「スーホの白い馬」の原典は、1961 年に登場する「月間絵本こどものとも」の『スーホのしろいうま』であり、そこでは「大塚勇三やく」と記されていた。その「やく」の元を辿っていくと、1956 年に登場した『馬頭琴:内蒙古民間故事』に所収されていた塞野による中国語で記された「馬頭琴」に行き着くことが判明した[24]。塞野の「馬頭琴」から大塚・赤羽による「スーホの白い馬」への改作は、例えば主人公の名前「スーホ」の異訳や「白馬と少年の友情」物語へのテーマの変換など、様々な差異を生み出していると指摘されている[25]。さらに、塞野による「馬頭琴」についても、本来的な馬頭琴由来譚ではなく、「階級闘争」のイデオロギーが強く反映された物語へとすり替えられている可能性があると指摘されている[26]。このような改作を重ねられた教材「スーホの白い馬」は、モンゴル文化が正確に反映された民話ではない、というのがこれまでの先行研究から提示された大きな問題である。一方で、教材「スーホの白い馬」についても、これまでに見てきた東アジアの民話教材と同様に、国語科教育の場においては、このような指摘に対して、「モンゴルという設定はそもそもフィクションである」[27]という立場をとるものもあり、教材「スーホの白い馬」の歴史的背景を等閑視し、教室に学びを広げているという現状がある。また、教材「スーホの白い馬」を巡る国語科教育の現状は、他にも様々存在するヴァリアントを没却し、「馬頭琴」の物語といえば、また有名なモンゴルの民話といえば、「スーホの白い馬」であるという言説をも生み出していることも明らかになった。以上を踏まえ、「馬頭琴」の〈教育文化史〉を通し、まず先行研究で述べられている複雑な歴史的背景について整理し、その上で物語のテーマの変容や付加されたイデオロギーを明らかにし、その背景に存在する文脈を検討すべきであることを確認した。

続く第二節においては、上述した検討項目を明らかにしていくために、まず通時的観点からの検討を行った。マクロ的視点による作品史の整理では、「馬頭琴」由来伝説の類型のうち、「スーホの白い馬」が属する〈スフ型〉を中心に取り上げた**【図 13】**。また、特に教材化がなされる前の資料に焦点を当て検討をしていった。続くミクロ的視点によるテキスト内部による分析では、**【図 13】**のうち、現在の日本の小学校国語科教科書教材「スーホの白い馬」に影響を与えたヴァリアントを選出し、それぞれの場面ごとの相違を比較した。その結果、次のようなことが判明した**【図 14】**。まず、「馬頭琴」由来伝説を初めて文字化した塞野の「馬頭琴」の影響を、様々なヴァリアントが受けているという事が判明した。そしてそれを日本に持ち込む際に、再話者によって様々な差異が生じていることも判明した。まず①人民中国版(＝塞野・虹霧(1959)「民話:馬頭琴の話」)・②伊藤版(＝伊藤貴麿(1959)「馬頭琴」)については、ほぼ忠実に原典(＝塞野(1956)「馬頭琴」)を翻訳をしているが、ところどころ異なる表記が見られる。しかし、藤井による塞野の「馬頭琴」の翻訳[28]を参照しても、殆ど差異が見られないため、翻訳の際の異訳や、読み手に伝



【図 13】〈スフ型〉の「馬頭琴」ヴァリアントの変遷図

わりやすいように内容を変容したものと考えられる。一方の③大塚(1961)版/教材(1965)版(＝大塚勇三・赤羽末吉(1961)『月間こどものとも:スーホのしろいうま』／光村図書出版(1965)「しろいうま」)では大幅な改作が加えられていることが明らかになった。作品の構造自体には手を加えず、【図14】に示した部分を中心に、改作の跡が見られた。その要因としては、子ども向け絵本にするにあたり、具体的な地名の削除や、主人公の設定をより読者層に近づけ、また「憎しみ」などの表記を削除するなど、叙述を就学前の幼児向けにわかりやすく



【図 14】〈スフ型〉「馬頭琴」のヴァリアントの影響関係

しようとした大塚の配慮が伺える。その結果、スーホと白馬の結びつきを強調した人間と動物の友情という主題に変容され、中国の内蒙古自治区にあたるチャハル草原をモンゴルに括ってしまうなど、塞野の「馬頭琴」が本来内包するものを削り取っているといえる。また大塚自身は塞野の「馬頭琴」を翻訳したと述べているが、既に日本で刊行されていた①人民中国版・②伊藤版を参照した可能性も否定できない。なお、③大塚(1961)版は現在絶版であり、③教材(1965)版も④教材(1977-2015)版(＝光村図書出版(1977)「スーホの白い馬」)では差し替えられているため、現在は目にすることができない。④大塚(1968)版/教材(1977-2015)版における改稿は、③大塚(1961)版/教材(1965)を踏襲しながらも、より塞野の「馬頭琴」に近い形で書き換えられている。しかし、削り取られてしまった記述を全て復活させたとは言い難く、あくまで③大塚(1961)版/教材(1965)をベースとした改作、すなわち主題の変容には変わりない。また改稿の際に、大塚が塞野の「馬頭琴」を再度参照したのか、また既に日本で刊行されていたヴァリアントを参照したかは現時点では不明である。これを踏まえ〈スフ型〉「馬頭琴」のヴァリアントの派生状況について明らかになったことを以下に三点示し、続く共時的分析における観点を定めていく。

①塞野による「馬頭琴」生成の背景
②大塚・赤羽の「スーホの白い馬」の再話を巡る文脈
③小学校国語科教科書教材「スーホの白い馬」登場の要因

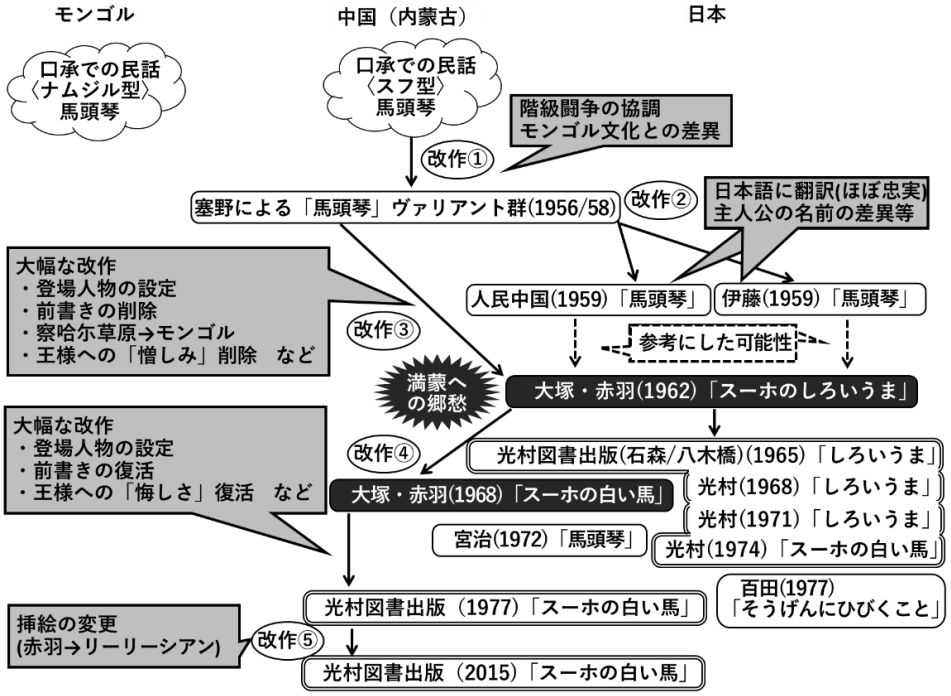
第三節では、上述した観点を踏まえ「馬頭琴」の共時的分析を行った。まず、「馬頭琴」が初めて文字化された塞野による「馬頭琴」を取り上げ、先行研究において指摘されているモンゴル文化との差異について整理した[29]。その上で、塞野の「馬頭琴」とモンゴル文化との空隙がなぜ生じたのかについて、塞野の「馬頭琴」生成の背景について分析した。その結果、塞野の「馬頭琴」は、「戦後のあたらしい中国」[30]の民話として当時の社会状況や政治思想の中で登場したものであり、社会主義プロパガンダの要素を含んでいることが判明した[31]。よって塞野がシリンゴルにおいてモンゴル人の年寄りの芸人から採集した原話[32]には当初、「階級闘争」のモチーフは存在していなかったと推察される。そして「馬頭琴」を階級闘争の物語に仕立て上げるために、塞野が改作を施した結果、ミンガドの指摘するようなモンゴル文化との空隙が生じ、階級闘争の不条理さに巻き込まれた蘇和と白馬を巡る悲劇と憎しみがクローズアップされた民話となってしまったことが明らかになった。

次に、塞野の「馬頭琴」を日本へと持ち込み、絵本「スーホの白い馬」として改作を行った大塚勇三・赤羽末吉に焦点を当て、絵本誕生の背景について探っていった。特に注目したのは、旧満州国引揚者の赤羽末吉である。赤羽は戦前、旧満州国の植民地政策の一環として成吉思汗廟の壁画作成に関わっており、その際に訪れた内蒙古の風景を写真やスケッチで持ち帰っていることを確認した[33]。また赤羽は「日本の子どもに蒙古をみせたい」[34]と強く願っており、その結果、絵本「スーホの白い馬」が登場したということが明らかになった。すなわち「スーホの白い馬」は、赤羽の内蒙古での「思い出」を子どもたちに見せたいという願い、すなわちモンゴル草原への憧景、郷愁の念が色濃く反映された作品であるといえる。

そして、同じような旧満州国への郷愁の念を持つであろう人物として、教材「しろいうま」が初登場した当時、光村図書出版の編集委員を務めていた石森延男に焦点を当て、教材化の背景を検討した。石森は、旧満州国で『満州補充読本』の編纂を行った他、児童文学者として創作活動も行っており、満州児童文学の生成・発展に情熱を注いでいたことが判明した[35]。そして後に「すきな満州

をはなれるのがつらかった」[36]と述懐するほど、満州への郷愁の念は強く、「蒙古などのすばらしい自然をわかってもらいたかった」[37]とも述べている。このような石森の満蒙地域への思いは、教材「しろいうま」以前に登場した中学校国語科教科書教材「草原万里」の登場からも見て取れる。また同じく編集委員である八木橋雄二郎も同じ旧満州国引揚者であることを明らかにし、このような国語科教育者による捨てきれない旧満州国への思いが、当時の国語科教育には存在していたことを確認した[38]。すなわち。八木橋と石森が、編集委員として名を連ねる教科書の教材として「草原万里」そして「しろいうま」が登場することは偶然ではないといえる。初版の絵本『スーホのしろいうま』が登場した時、それは冊子のような小さな絵本であった。しかし自分たちと同じく大陸からの引揚者である赤羽末吉の、望郷の念が色濃く反映されたかの作品を、国語教育者たちが見逃す筈はなかった。こうして 1961 年からわずか 4 年とたたないうちに、教材「スーホの白い馬」は小学校国語科教科書に登場し、そして 50 年以上、掲載され続ける定番教材と化したのである。すなわち、「スーホの白い馬」の小学校国語科教科書登場の背景には、こうした引揚者たちの「満州」意識[39]ならぬ「蒙古」意識、そして郷愁の念の影響が少なからず及んでいたと考えられることを明らかにした。

第四節では、「馬頭琴」の改作／継承を巡る文脈を整理し【図 15】、明らかになったことについて、民話(文化的考察)／教材(教育的考察)／東アジア(歴史的考察)という観点から分析した。教材「スーホの白い馬」の背景にには、旧満州国における引揚者達の「記憶」の影響が少なからずあることが判明した。またテクストは、戦後直後の中国の政治的思想の元に登場した塞野の「馬頭琴」に、大塚の手が加えられたものである。これらを踏まえるならば、教材「スーホの白い馬」は戦前・戦後の東アジアの「記憶」や「歴史」が入り混じった複雑な作品であるといえる。東アジアの民話教材は、それぞれの〈教育文化〉があり、抱える事情も歴史も異なっている。しかしながら、三教材、「三年とうげ」・「うさぎのさいばん」・「スーホの白い馬」を重ねてみると、戦前から戦後へと通じる東アジアの「記憶」や「歴史」を抱え、現代まで生き残ってきたということが判明した。そして今後も、「三年峠」・「兎の裁判」・「馬頭琴」が、新たな「記憶」を接ぎ木し、姿形を変えながらも、生き残っていく可能性について示唆した。

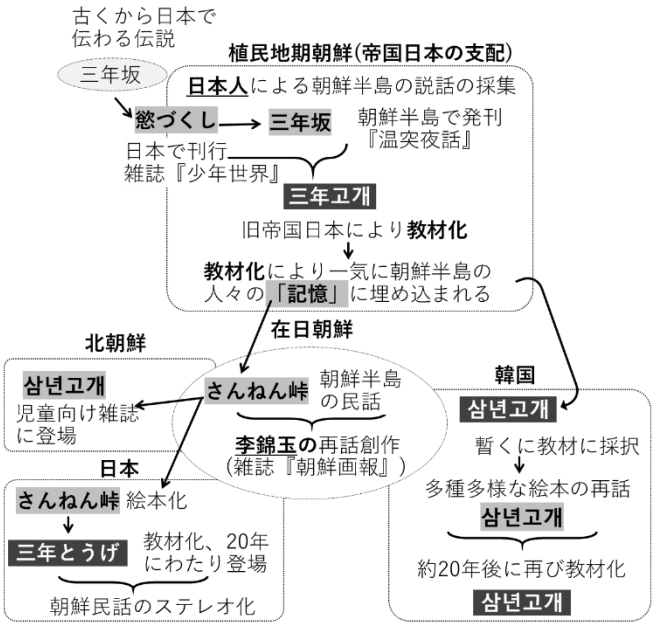


【図 15】日本の小学校国語科教科書に至るまでの「馬頭琴」の改作・継承の様相

終章　本研究の成果・課題・展望

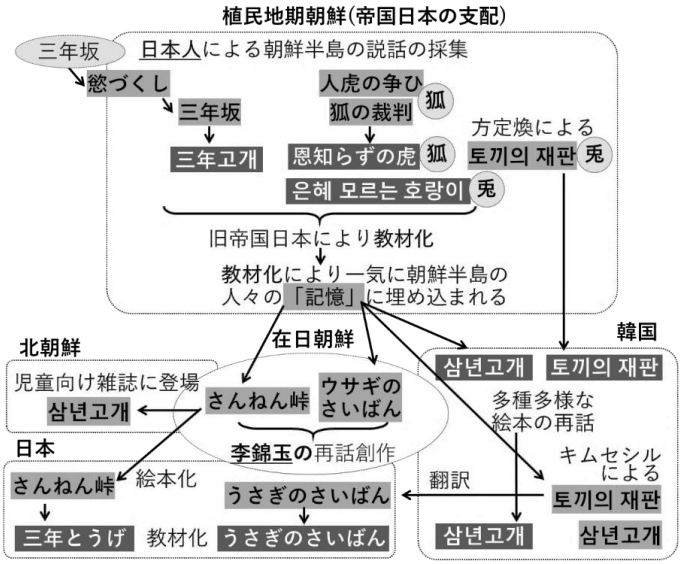
終章では、これまでの研究についての成果・課題・展望について記した。

第一節では、「三年峠」、「三年峠」と「兎の裁判」(朝鮮半島の民話)、「三年峠」と「兎の裁判」と「馬頭琴」(東アジアの民話)の〈教育文化史〉を重ね合わせ、本研究で明らかにできたことを整理した。「三年峠」の〈教育文化史〉をまとめると【図 16】のようになる。現在の我々の元に民話「三年峠」が届くまでに大きな役割を果たしたものとして、「資料」と「記憶」、そしてそれを伝達する「媒介者」の存在が挙げられる。「資料」の通時的配列および影響関係については第二章で明らかにした通りである。1917 年の『少年世界』における「慾尽くし」から始まり、朝鮮総督府による教材「三年고개」を経て、現在の日本の小学校国語科教科書の教材「三年とうげ」および韓国の国定小学校国語科教科書の教材「삼년고개」まで派生していることが判明した。またその派生において大きな影響を及ぼしたのは教材「三年고개」であることも明らかにすることができた。「資料」は当然であるが耳も口も持たない。「資料」から「資料」へとバトンを渡す役割を果たしたのが「媒介者」そしてそれを取り巻くコンテクストである。これに焦点を当てたのが第三章である。「媒介者」らは、その時代・地域によって「三年峠」を「再話」という形で改作し、意識的また無意識的にその「資料」に触れた人々の「記憶」を塗り替えている。特に不特定多数の集団の「記憶」に影響を及ぼす教科書教材の齎した影響は大きい。日本から朝鮮に対するオリエンタリズム、朝鮮を日本の一部としようとする内鮮融和、日本と朝鮮の狭間に置かれた在日朝鮮というディアスポラ、そして現在の国際社会に基づく異文化理解に、いかに「三年峠」が利用されてきたか。第四章では「三年峠」の内在する問題について、民話・教材・東アジアとしての側面から追及した。



【図 16】「三年峠」の〈教育文化史〉研究のまとめ

次に、「兎の裁判」の〈教育文化史〉研究で明らかになったことを踏まえ、朝鮮半島の民話の〈教育文化史〉から何が見出せるのかを明らかにした。【図 16】に「兎の裁判」の



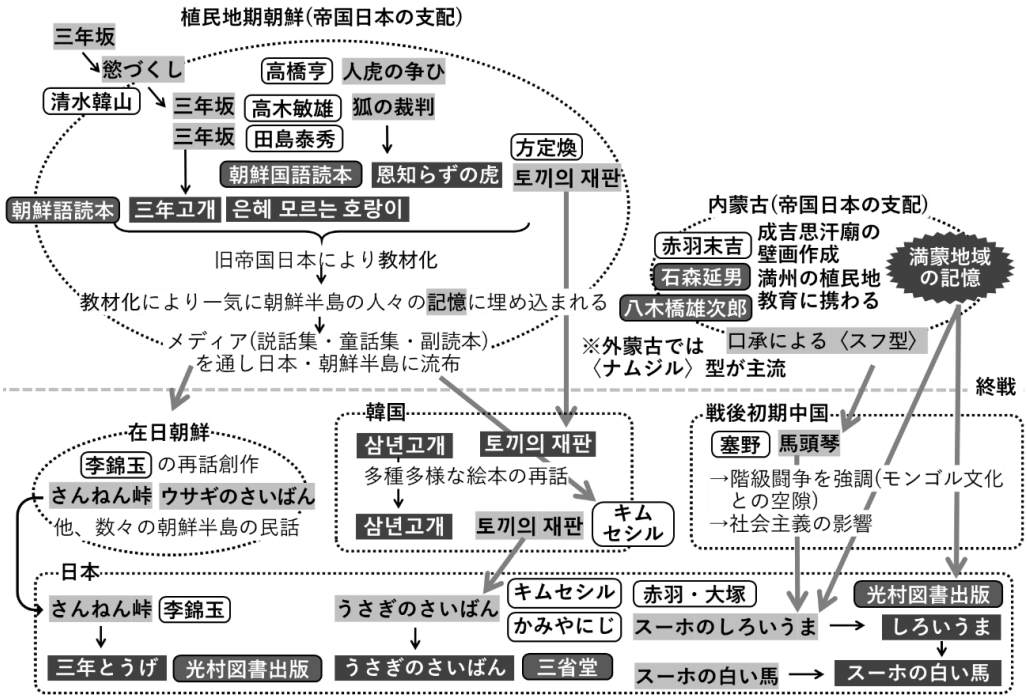
【図 17】朝鮮の民話の〈教育文化史〉研究のまとめ

〈教育文化史〉を加えると【図 17】ようになる。第五章では、「兎の裁判」の〈教育文化史〉研究から、教材「うさぎのさいばん」もまた植民地期朝鮮において教材化されていることが判明した。「三年峠」と異なるのは、朝鮮第二期『朝鮮国語読本』と朝鮮第三期『朝鮮語読本』において教材化なされており、かつその内容に差異が見られるという点である。「兎の裁判」は、題名にも見られる最終裁判官の動物が、主に兎と狐とする二つの類型が存在していた。教材「恩知らずの虎」に代表される狐を最終裁判官とするヴァリアントは戦前の多くのヴァリアントに影響を与える。戦後は、教材「(은혜 모르는 호랑이) 」や方定煥による「토끼의 재판」に見られる兎を最終裁判官とするものが主流となり流布していく。しかしながら、教材「恩知らずの虎」に内在する、教訓「感恩生活の美しさ」を学習者に教え込もうとする姿勢は、日本の小学校国語科教科書教材「うさぎのさいばん」によって継承されていた。教訓「感恩生活の美しさ」は先にも述べた植民地教育政策の一つ「内鮮融和」によって強調されたものであり、一見直接的な影響を受けていない様に見える教材「うさぎのさいばん」によって再生産されたことになる。その背景には、媒介者による「記憶」がその影響の一つであることが考えられる。

このように、2018 年現在、日本の小学校国語科教科書に見られる朝鮮半島の民話教材は、それぞれ異なる文脈を持つものの、朝鮮総督府によって塗り替えられた「記憶」を継承していることが判明した。そして、それぞれの教材は昔から朝鮮半島に伝わる「民族の文化遺産」として教室で扱われ、学習者に学びを広げているのである。また、教材「三年とうげ」の作者である李錦玉は「ウサギのさいばん」についても再話創作しており、一方で教材「うさぎのさいばん」の原作者であるキム・セシルもまた「三年峠」を再話創作している。これらの民話は、児童文学作家にとって再話創作のしやすいものであり、それだけ人々の「記憶」に植え込まれたものであるともいえる。そして戦前・戦後を問わずこれらの民話を教材化した国語教育者は、「三年峠」や「兎の裁判」に内在する教訓、幼い子供が知恵で老人を助ける「孝行譚」や、恩知らずの虎を賢い動物が懲らしめる「勧善懲悪」を、その地域・時代の「教育に相応しい」と感じ、子ども達に教授するための読み物として取り上げている。そして、戦前は内鮮融和に基づく民話の利用、戦後は異文化理解に基づく民話の利用を試みたところに、共通性が浮かび上がる。

第六章で行った「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究を加え、「三年峠」・「兎の裁判」・「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究をまとめると【図 18】ようになった。「馬頭琴」は、他の二つの民話とは異なり、戦後に登場している。しかし、初めて文字化された馬頭琴由来伝説である塞野の「馬頭琴」は戦後初期中国を巡る政治的思潮の影響もあり、階級闘争の主題が強調され、モンゴル文化との空隙が見られるものであった。さらに、それを人間と動物の友情物語として書き換えたのが大塚・赤羽による「スーホの白い馬」である。その再話創作の登場や教材化の背景には、旧満州国引揚者らによる満蒙地域への郷愁の念が深く関わっていることが判明した。具体的には、「スーホの白い馬」の絵画担当である赤羽末吉の植民地政策の一環である成吉思汗廟の壁画制作の経験が「モンゴルを日本の子供達に見せたい」という思いを生み、「スーホの白い馬」誕生のきっかけを作ることとなった。また、戦後初期の光村図書出版の教科書作成に携わり、教材「しろいうま」が登場した 1965 年に編集委員を務めていた石森延男・八木橋雄次郎もまた旧満州国の引揚者であり、当時の植民地教育に深く関わっていた。また両者共に満州児童文学の創作活動を行っており、その経験や満蒙地域の広大な景色への懐古の念が、中学校における教材「草原万里」、そして教材「スーホの白い馬(しろいうま)」が登場したことに繋がる文脈を明らかにすることができた。

それぞれの民話は異なる文脈を有しながらも、時代と共に改作され、個人と集団の「記憶」の塗り替えと形成を繰り返し、そして媒介者によって利用されてきたという共通項が存在することが判明した。また、再話や再話創作の共通項として、挿話(要素群)には手を加えられず、モチーフ(基本的要素)に手が加えられているということが判明した。そして、登場人物(医者→老人、狐→兎、蘇和→スーホ)を始めとするモチーフの変容が、民話全体の主題の変容にも繋がり、民話そのものに対するイメージを塗り替えている。しかしながら挿話については手を加えられていないため、読み手に同じ民話だという錯覚を引き起こしてしまう。また変更・増加されたモチーフには、媒介者による想が意識・無意識的に入り込んでいる。それは、民話が舞台としている地域の民族観、教訓などに見られる「こういう人間たるべき」という価値観、翻訳や再話の際に見られる言語観、などである。これらの要素は読者対象や掲載される媒体によって次々と入れ替えられていく。こうして、内在する様々な要素に見られる「観」が、あたかも昔から存在し言い伝えられてきたかのように現在の我々の目に映り、そこに疑う余地を持つことなく、読み手に受容されてしまうのである。こうしてみると、民話の「民」の部分には時代状況によって「皇民」・「人民」・「国民」と、その時代が理想とする「民」像が当てはめられていることがわかる。そして国語教育は、そうした理想の「民」像を鮮明に描き出す「民話」を教材化することで、その時代に相応しいと思われる人間像を学習者に形成しようと試みたといえるのである。



【図 18】東アジアの民話の〈教育文化史〉研究のまとめ

第二節では本研究の課題と展望について述べた。「三年峠」・「兎の裁判」・「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究のそれぞれの課題について整理した上で、東アジアの民話を巡る〈教育文化史〉研究の課題を明らかにした。具体的には次の三点である。

一点目は、東アジアの民話について、2018 年度現在使用されているものを取り上げたため、朝鮮半島とモンゴルという特定の地域の検討に偏ってしまった点である。一方で現在までに小学校国語科教科書において掲載されたことのある東アジアの民話は、圧倒的に朝鮮半島の民

話が多く、またその作品の殆どは李錦玉によって手掛けられたものだという現状が存在する。このような教科書教材に関する媒介者の利権の問題や、特定の地域への偏りについて、今後も考察していく必要がある。そして、東アジアの文化圏という視点から日本の民話についても〈教育文化史〉を記述していく必要があると考える。自国の民話をどのように国語教育が利用してきたのか、改めて明らかにしていかねばならないと考える。

二点目は、東アジアの民話を巡る〈教育文化史〉について、学習者の読みの様相を鮮明には描き出せなかった点である。本章の総合考察でも述べたように、東アジアの民話が教材化された時、どのような「記憶」を学習者に形成しているのか、具体的様相を学習者の個体史から読み取っていく必要があると言える。特に戦前の資料については散逸しているものが多く、実際に東アジアの民話教材をどのように読み、どのような学びを得たかについては、趣意書や教育雑誌における指導事項や教材研究の記事から推察するに留まってしまった。この点については、さらなる資料収集を重ね、学習者の視点も含めた〈教育文化史〉の構築をさらに目指したいと考える。

三点目は、東アジア文化圏におけるそれぞれの地域における民話について、〈教育文化史〉について明らかにすることができなかった点である。すなわち、戦前の帝国日本の影響を少なからず受けた、それぞれの地域における自国の民話が、その後どのように派生していったのか、鮮明な〈教育文化史〉を描き出したとは言い難い。これについては、その国・地域の国語科教育研究者との協力が必要不可欠であるといえる。それぞれの国・地域における民話を巡る〈教育文化史〉から、東アジア文化圏における国語科教育の、戦前から戦後への断絶・継承・再構築の様相が見て取れる可能性があるといえ、今後も検討していく必要がある。

本研究の展望は次の通りである。本研究により、東アジア、特に朝鮮半島・内蒙古を題材にした民話教材に内在する問題について様々な視点から明らかにすることができた。特に東アジアにおける民話は、戦前の植民地を中心に、帝国日本による政治・教育に利用され、また戦後、児童文学者による再話創作活動や国語科教育者による教材化により「創られた民族の記憶」が形成・伝承されていったということが明らかになった。しかし、これまでの研究では、具体的な民話の検討やその周辺に焦点が当てられているのみであって、東アジア全体の問題として捉えられているわけではない。そこで、「東アジア文化圏」という枠組みから、民話がどのように民族の記憶の捏造と伝承に関わっていったか、被植民地国(台湾・満州・南洋諸島)および日本における、教科書などのメディアを中心に、通時的かつ共時的な分析をさらに進めていく必要がある。また、民話が生成され、教材化されたり児童文化へと蔓延する背景には、民族政策を巡る政治的思想、民話を巡る民俗学・国語教育学・児童文学の様相が関わっている。そこで、戦前の東アジアにおける民族政策の具体的内実や、東アジアの民話を教育に用い、児童文化に広げていく上で大きな影響力を与えた人物に焦点を当て検討する必要がある。今、国際化が進行し近隣諸国との関係が重視される中で、東アジア文化圏における民話に関する問題を取り上げ検討することは、日本を含む東アジア文化圏における民話のこれからの在り方、そして正しい異文化理解を促進していく上で重要な視点を与えていくことに繋がると考えられる。

---

[1]幾田伸司(2013)「2教科書教材史研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』学校図書株式会社,pp.177-184
[2]府川源一郎(2014)『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究:リテラシー形成メディアの教育文化史』ひつじ書房,p.2

[3]幾田伸司(2013),pp.177
[4]浜本純逸(2001)『国語教育史研究の展望と課題』「日本教育史研究(20)」,p.82
[5]千田洋幸(2009)『テクストと教育:「読むこと」の変革のために』渓水社,p.203-208
[6]三ツ井崇(2008)「「三年峠」をめぐる政治的コンテクスト:朝鮮総督府版朝鮮語教科書への採用の意味(京都における日本近代文学の生成と展開)」,『佛教大学総合研究所紀要(2008(別冊))』,p.275-294
[7]ミンガド・ボラグ(2016)「「スーホの白い馬」の真実 モンゴル・中国・日本それぞれの姿」風響社
[8]例えば国語科教育分野において東アジアの民話教材を共時的に取り上げた足立悦男・李普銀による研究がある。足立らは、木下順二の「かにむかし」と박윤규による「괄죽할멈과호랑이(あずき粥ばあさんと虎:論者訳)」のテキストや挿絵の比較などを通し、文化的背景の相違点について明らかにしているが、特定の教材/作品の比較研究にとどまり、その成立背景や教材採録史などといった通時的観点からの検討はなされていない。
[9]金容儀による「瘤取り譚」を主軸に据えた韓日比較研究では、読本に登場した教材「瘤取り譚」に内在する内鮮一体のイデオロギーを明らかにし、文化への影響関係を考察している。金容儀のこの研究は、東アジアの民話教材を共時的・通時的に検討したものであり、本研究の課題意識と近いところにある。一方で、「瘤取り譚」が教育現場でどのように使用されたのかといった教育からの視点は希薄であり、また日本と韓国の比較に留まり、東アジアという広い観点からは検討されていない。
[10]イ・ヨンスクは、上田万年や保科孝一といった近代の「国語」概念の形成に携わった人物を取り上げ国語国字問題との関わりを考察し、安田敏郎は植民地期朝鮮における言語政策に焦点をあて、帝国日本と「国語」の関係を描き出している。一方で、実際に彼らの思想がどのように教材などの具体物に表象されていたかについては論じられていない。
[11]千恵淑(2008)「삼년고개 설화의 전승양상으로 본한・일문화비교」『佛教大学総合研究所紀要(2008(別冊))』pp.295-318
[12]三ツ井崇(2008)「「三年峠」をめぐる政治的コンテクスト : 朝鮮総督府版朝鮮語教科書への採用の意味 (京都における日本近代文学の生成と展開)」『佛教大学総合研究所紀要(2008(別冊))』pp.275-294
[13]三ツ井崇(2008)「「三年峠」をめぐる政治的コンテクスト:朝鮮総督府版朝鮮語教科書への採用の意味(京都における日本近代文学の生成と展開)」『佛教大学総合研究所紀要 (2008(別冊))』p.293
[14]金廣植(2016)「近代初期に報告された朝鮮民間説話「三年峠(三年坂)」の考察」『比較民俗学会報 37(2)』,pp.14-20
[15]崔仁鶴(1976)『韓国昔話の研究 : その理論とタイプインデックス』弘文堂,pp.106-108
[16]萩原彦三(1966)『日本統治下の朝鮮における朝鮮語教育』友邦協会,pp.10-11
[17]朝鮮総督府(1933)『普通学校朝鮮語読本:巻四』朝鮮総督府,p.41
[18]李錦玉(1997)「出会いとひろがり:私と民話」全国大学国語教育実践研究会編『実践国語研究 別冊「三年とうげ」教材研究と全授業記録』明治図書,p.6-19
[19]『小学生の国語』編集委員会編著(2015),p.231
[20]沈宜麟(1933)「朝鮮語讀本卷一の教材解説」『朝鮮の教育研究 第五巻第三号』朝鮮初等教育研究會,p.85 において、「五十五:(은혜 모르는 호랑이)」と題字が付けられていたため、これを参考に括弧つきの題字を提示した。
[21]橋爪南洋(1917)「朝鮮物語の研究」『最近教材:第二巻第四号』p.18
[22]鹽飽訓治(1931),p86
[23]朝鮮総督府(1932)「鵲の恩返し」『普通學校國語讀本卷六』,pp.96-107 及び朝鮮総督府(1935)『普通學校四年生國語讀本卷六編纂趣意書』朝鮮総督府,p.28(なお朝鮮第三期の『普通學校國語讀本卷六編纂趣意書』の現存が確認できなかったため、同教材が収録されていた『普通學校四年生國語讀本卷六編纂趣意書』から該当箇所を抜粋した。)
[24]呉羽長(1990)「「スーホの白い馬」の教材論的考察」『富山大学教育実践研究指導センター紀要 6』pp.67-78
[25]成實朋子(2009)「「スーホの白い馬」と中国の民間故事「馬頭琴」について」『学大国文(52)』pp.61-76
[26]ミンガド・ボラグ(2016)『「スーホの白い馬」の真実:モンゴル・中国・日本それぞれの姿』風響社
[27]木下ひさし(2001)「作品の「深層」と子どもの読みと」田中実・須貝千里『文学の力×教材の力:小学校編 2 年』,教育出版株式会社,p.183
[28]藤井麻湖(2003)『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社,pp.14-17
[29]ミンガド・ボラグ(2016),pp.74-81
[30]伊藤貴麿(1959)「解説:中国童話について」『中国童話集:世界児童文学全集 12』あかね書房,p.312
[31]ボルジギン・ブレンサイン(2015)『内モンゴルを知るための 60 章』明石出版,p.38
[32]内蒙古語言語文学歴史研究所文学研究室(1979)『蒙古族民間故事選』上海文芸出版社,p.55
[33]小西正保編(1977)『赤羽末吉』すばる書房,p.67
[34]同上
[35]石森延男(1972)「満州児童文学回想」『児童文学研究(2)』,p.30-33
[36]石森延男(1971)「あとがき」『石森延男児童文学全集:第 14 巻』学習研究社,p.307
[37]同上
[38]秋田県広報協会(1968)「中山善三郎連載対談:国語研究家八木橋雄次郎」『あきた(39)』,p.57
[39]渋谷孝(1992)『現代国語教育論集:石森延男』明治図書,p.490

Ⅳ.主要参考文献

単行本

赤羽末吉(1979)『絵本よもやま話』偕成社
赤羽末吉(2005)『私の絵本ろん：中・高校生のための絵本入門』平凡社ライブラリー
赤羽末吉(2010)『画集：赤羽末吉の絵本』講談社
赤堀孝(1951)『教育文化史概説：民主教育文化叢書』理想社
アルフォンス・ドーデ著;大久保和郎訳『月曜物語』旺文社
李錦玉(1981)『さんねん峠』岩崎書店
李錦玉(1987)『りんごのおくりもの』朝鮮青年社
李錦玉(1996)『さんねん峠〈朝鮮のむかしばなし〉』岩崎書店
石井正己他(2007)『植民地の昔話の採集と教育に関する基礎的研究(平成 18 年度広域科学教科教育学研究経費報告書)』東京学芸
石井正己他(2013)『帝国日本の昔話・教育・教科書(平成 23 年度広域科学教科教育学研究経費報告書)』東京学芸
石井正己他(2016)『国際化時代を視野に入れた文化と教育に関する総合的研究(「平成 23 年度広域科学教科教育学研究経費報告書)』東京学芸
石森延男(1971)『石森延男児童文学全集:第 14 巻』学習研究社
磯田一雄(1999)「皇国(みくに)の姿」を追って:教科書に見る植民地教育文化史』皓星社
板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔(2013)『東アジアの記憶の場』河出書房新社
伊藤貴麿(1959)『中国童話集:世界児童文学全集 12』あかね書房
イ・ヨンスク(2012)『「国語」という思想:近代日本の言語認識』岩波書店
巖谷小波(1900)『世界お伽噺 6 第 21-24 編』博文館
内蒙古語言語文学歴史研究所文学研究室(1956)『馬頭琴:蒙古族民間故事選』上海少年児童出版社
内蒙古語言語文学歴史研究所文学研究室(1979)『蒙古族民間故事選』上海出版社
内山克己・熊谷忠泰・増田史郎亮(1967)『近世日本教育文化史:現実の分析に立った』学校図書
ウラジミール・プロップ著;大木伸一訳(1972)『民話の形態学』白馬書房
江島其磧(1732)『咲顔福の門』銭屋庄兵衛
大川悦男(1966)『日本民話読本』実業之日本社
大竹聖美(2008)『植民地期朝鮮と児童文化:近代日韓児童文化・文学関係史研究』社会評論社
賈芝・孫剣冰(1959)『中国民間故事選』人民文学出版社
加藤鉄太郎(1885)『妖怪府:一読一驚』尚成堂
川村湊(1966)『「大東亜民俗学」の虚実』講談社
木下順二(1960)『日本の民話』毎日新聞社
金広植(2015)『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』勉誠出版
金成妍(2010)『越境する文学：朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』花書院
金容儀(1998)『韓日昔話の比較研究:近代教科書に語られた「瘤取り爺」譚を中心に』大阪大学博士論文
金海相海(1943)『半島名作童話集』盛文堂書店
小西正保編(1977)『赤羽末吉』すばる書房
駒込武(1966)『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
西郷竹彦編(1961)『シリーズ・民話と教育 1:国民教育における民話』明治図書
西郷竹彦編(1961)『シリーズ・民話と教育 2:民話の教材分析と授業』明治図書
西郷竹彦編(1961)『シリーズ・民話と教育 3:民話の世界・民話の理論』明治図書
佐藤秀夫(1988)『ノートや鉛筆が学校を変えた』平凡社
佐藤秀夫編(2005)『學校の文化:教育の文化史 2』阿吽社
佐野通夫(2006)『日本植民地教育の展開と朝鮮民衆の対応』社会評論社
山陰中央新報社(1982)『島根県大百科事典:上』山陰中央新報社
児童讀物研究會(1925)『保科孝一監修文藝讀本』杉本書店
渋沢青花(1980)『朝鮮民話集』社会思想社

渋谷孝(1992)『現代国語教育論集:石森延男』明治図書
関敬吾(1982)『関敬吾著作集 6:比較研究序説』同朋舎
全国大学国語教育学会編(2013)『国語科教育学研究の成果と展望』学校図書株式会社
全国大学国語教育実践研究会編(1996)『実践国語研究:別冊「三年とうげ」教材研究と全授業記録』明治図書
徐斗里(1991)『朝鮮の昔ばなし』茨城図書
孫晋泰(1930)『朝鮮民譚集』郷土研究社
高木敏雄(1917)『新日本教育昔噺』敬文館
高木敏雄(1977)『童話の研究』講談社
田島泰秀(1923)『温突夜話』教育普成株式会社
高橋俊乗(1931)『日本教育文化史』同文書院
高橋亨(1910)『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房
田中克彦(1981)『ことばと国家』岩波書店
田中克彦(1996)『名前と人間』岩波新書
田中実・須貝千里(2001)『文学の力×教材の力　小学校編2年』教育出版
道荣尕・安柯钦夫(1983)『青海湖的伝説』内蒙古人民出版社
崔仁鶴(1976)『韓国昔話の研究:その理論とタイプインデックス』弘文堂
崔仁鶴(1995)『韓日昔話の比較研究』三弥井書店
崔仁鶴・厳鎔姫編著(2013)『韓国昔話修正　第 2 巻』悠書館
朝鮮総督府(1924)『朝鮮童話集』朝鮮書籍印刷
千田洋幸(2009)『テクストと教育:「読むこと」の変革のために』渓水社
中達三郎(1888)『伊蘇普物語:寓意懲勧』木村多喜
仲村修・韓丘庸・したかしん(1989)『児童文学と朝鮮』神戸学生青年センター出版部
中村亮平(1926)『朝鮮童話集』漢城図書
那須田稔/ビャンバサイン・ツェレンドルジ/オユンツェツェゲ・プレブダガバ(2008)『天馬ジョノン・ハル:モンゴル馬頭琴物語』ひのくま出版
滑川道夫(1981)『桃太郎像の変容』東京書籍
日本児童文学学会編(1988)『児童文学事典』東京書籍
日本児童文学者協会編(1981)『国語教科書攻撃と児童文学』青木書店
野間光辰編(1993)『新修京都蔡書:第 1 巻』臨川書店
野間光辰編(1994a)『新修京都蔡書:第 5 巻』臨川書店
野間光辰編(1994b)『新修京都蔡書:第 11 巻』臨川書店
野村純一編(1984)『昔話と文学:日本昔話研究集成5』名著出版
野地潤家(1956)『国語教育:個体史研究』光風教育双書
朴貞蘭(2013)『「国語」を再生産する戦後空間:建国期韓国における国語科教科書研究』三元社
旗田巍編『日本は朝鮮で何を教えたか』あゆみ出版
埴生知麿(1979)『対訳朝鮮語読本一,二,三巻』私家版
埴生知麿(1981)『対訳朝鮮語読本四,五,六巻』私家版
樋口紅陽(1922)『童話の世界めぐり』九段書房
府川源一郎(1992)『消えた「最後の授業」:言葉・国家・教育』大修館書店
府川源一郎(2014)『明治初等国語科教科書と子ども読み物に関する研究: リテラシー形成メディアの教育文化史』ひつじ書房
福田晃編(1984)『昔話の発生と伝播:日本昔話研究集成2』名著出版
藤井麻湖(2003)『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社
古田拡・石井庄司・青山廣志・井上敏夫・野地潤家, 1987,『芦田恵之助国語教育全集 第 25 巻』明治図書
ボルジギン・ブレンサイン(2015)『内モンゴルを知るための 60 章』明石出版
松村武雄(1928)『世界童話大系』世界童話大系刊行會
宮脇弘幸他(2009)『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究:国定教科書との異同の観点を中心に』「科学研究費補助金(基盤研究 B・一般)研究成果報告書」
宮本祐規子(2016)『時代物浮世草子論:江島其磧とその周縁』笠間書院
三輪環(1919)『伝説の朝鮮』博文館

ミンガド・ボラグ(2016)『「スーホの白い馬」の真実 ： モンゴル・中国・日本それぞれの姿』風響社
民話の会(1956)『民話の発見』大月書店
村松一弥編(1971)『中国の民話』毎日新聞社
森時彦編(2009)『20 世紀中国の社会システム:京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』京都大学人文科学研究所
八木橋雄次郎(1978)「石森延男先生と国語教科書」『石森延男国語教育選集:第五巻』光村図書
安田敏朗(1997)『帝国日本の言語編制』世織書房
安田敏朗(1998)『植民地のなかの「国語学」』三元社
安田敏朗(1999)『「言語」の構築:小倉進平と植民地朝鮮』三元社
柳田国男(1942)『桃太郎の誕生』三省堂
山本美千枝(2004)『日韓昔話絵本の比較と教材化の研究』私家版
ラティモア・オーエン・松田忠徳訳(1994)『モンゴルの民話』恒文社
李淑子(1985)『教科書に描かれた朝鮮と日本:朝鮮における初等教科書の推移(1895-1979)』ほるぷ出版
연변민간문학연구회(1991)『연변민간문학집』민속원
운식(1997)『전설의 현장을 찾아서』민속원
이근(2010)「삼년고개」『만화로 보는 한국설화1』계림북스
이시준・장경남・김광식(2014)『다지마야스히데의 온돌야화:식민지시기일본어조선설화집자
최영재(1991) 『삼년고개:애니메이션어린이 전래동화 59』금성출판사
한국정신문화연구원(1986)『한국구비문학대계:전남장성읍설화 11』
William,E,Griffis(1912)『The unmannerly tiger, and other Korean tales』Thomas Y. Crowell Company
William,E,Griffis(1912)『Fairy tales of old Korea』Harrap
Эрдэнэчимэг Л(1994)『Хуурын тат лага』Соёлурлагсудлалын хүрээлэн

論文

秋田県広報協会(1968)「中山善三郎連載対談:国語研究家八木橋雄次郎」『あきた(39)』,p.57-58
足立悦男・李普銀(2008)「日韓民話文学の比較研究:「かにむかし」と「팥죽 할멈과 호랑이」『島根大学教育臨床総合研究(7)』pp.65-79
石井正己他(2013)『帝国日本の昔話・教育・教科書』「東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科広域科学教科教育学研究経費報告書」
石森延男(1972)「満州児童文学回想」『児童文学研究(2)』,p.30-33
市古夏生(1993)「山本泰順と中川喜雲:近世地誌と文学」『国語と国文学 70(11)』pp.80-90
上田崇仁(2000)「国定読本と朝鮮読本の共通性」『植民地教育史研究年報(3)』pp.51-64
臼田甚五郎・野村純一編(1976)「民話の事典」『国文学:解釈と教材の研究 21(15)』,pp.196-222
内田孝(2015)「報告Ⅳ:内モンゴル近現代文学研究からみた『青旗(フフ・トグ)』紙:モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ」『OUFC ブックレット 7』,pp.37-64
大川育子(2017)「八木橋雄次郎の国語教育 大連の記憶から」『早稲田大学国語科教育研究(37)』,p.73-83
小野和子(1983)「人びとの暮らしの中にある光と影の奥底を:再話における視点の問題」『日本児童文学 29(10)』,pp.6-17
北川知子(1994)「朝鮮総督府編纂『普通學校國語讀本』の研究:朝鮮民話・伝説に取材した教材についての一考察」『国語教育学研究誌』pp.1-22
北川知子(2003)「朝鮮総督府編纂『普通学校国語読本』の研究:児童の「生活」に着眼した教材について」『植民地教育史研究年報(6)』pp.34-52
北川知子(2005)「国語教育と植民地:芦田惠之助と「朝鮮読本」」『植民地教育史研究年報(8)』pp.44-61
北川知子(2006)「朝鮮総督府編纂『普通学校国語読本』が語ること」『植民地教育史研究年報(9)』pp.23-34
金廣植(2013)「1920 年代前後における日韓比較説話学の展開:高木敏雄、清水兵三、孫晋泰を中心に」『比較民俗研究』pp.17-21
金廣植(2015)「植民地期朝鮮童話集における改作に対する実証的な研究」『昔話伝説研究(34)』pp.93-103
金廣植(2016)「近代初期に報告された朝鮮民間説話「三年峠(三年坂)」の考察」『比較民俗学会報 37(2)』pp.14-20
呉羽長(1990)「「スーホの白い馬」の教材論的考察」『富山大学教育実践研究指導センター紀要 6』pp.67-78
清水兵三(1960)「出雲と朝鮮:思い起こすままに」『伝承:五号』p.27

沈恩定(2003)「「삼년고개」와「산넨도게(三年とうげ)」비교연구」『日本学報第 55 輯第 2 巻』pp.285-301
鈴木寛之(2004)「『郷土研究』創刊号と高木敏雄」『文学部論叢 81』pp.35-36
千恵淑(2008)「'삼년고개'설화의　전승양상으로본한·일문화비교」『佛教大学総合研究所紀要(2008(別冊))』pp.295-318
成實朋子(2009)「「スーホの白い馬」と中国の民間故事「馬頭琴」について」『学大国文(52)』pp.61-76
朴校熙(2008)「朝鮮半島における国語教育史についての考察」『横浜国大国語科教育研究 29』pp.45-46
浜本純逸(2001)『国語教育史研究の展望と課題』「日本教育史研究(20)」pp.82-100
フフバートル(2008)「娘に語った黒い馬の話(研究余滴)」『學苑(816)』,pp.110-126
前島志保(1996)「児童観の中の方定煥」『比較文学・文化論集(12)』,pp.1-15
益田勝実(1972)「創作民話論の瀬ぶみ」『日本児童文学 18(7)』pp.35-41
三ツ井崇(2008)「「三年峠」をめぐる政治的コンテクスト:朝鮮総督府版朝鮮語教科書への採用の意味(京都における日本近代文学の生成と展開)」『佛教大学総合研究所紀要(2008(別冊))』p.275-294
三ツ井崇(2013)「引き継がれるテクスト, 読み換えられるテクスト:「三年峠」論・補遺」『韓国朝鮮文化研究:研究紀要(12)』pp.1-19
吉村裕美・中河督裕(2008)「三年峠と三年坂:韓国・日本そして京都(京都における日本近代文学の生成と展開)」『佛教大学総合研究所紀要(2008(別冊))』p.253-274
片山登美子(1972)「民話と教育:日本昔話の伝承と小学校国語教科書」『同志社女子大學學術研究年報 23(2)』pp.378-406
片山登美子(1982)「民話と教育:日本昔話の伝承と小学校国語教科書(その 2)」『同志社女子大學學術研究年報 33(2)』pp.148-177
片山登美子(1982)「民話と教育:日本昔話の伝承と小学校国語教科書(その 3)」『同志社女子大學學術研究年報 45(2)』pp.219-242

雑誌

『少年世界』博文館(創刊号,第 1 巻 2 号,第 1 巻 3 号,第 7 巻 3 号,第 16 巻第 13 号,第 18 巻第 10 号)
『어린이』開闢社(第 9 巻第 10 号)
『文教の朝鮮』朝鮮教育会(第 37 号)
『朝鮮の教育研究』朝鮮初等教育研究会(創刊号・第 12 号, 第 58 号)
『最近教材』方秀社(第 2 巻第 4 号)
『아동문학』조선작가등맹출판사(1983 년 5 호)
『朝鮮画報』朝鮮新報社(第 25 巻第 2－12 号)
『人民中国』人民中国編集委員会(1959 年第 1 号)

教科書・付属指導書

「三年とうげ」関連

朝鮮総督府(1932)「鵲の恩返し」『普通學校國語讀本卷六』
朝鮮総督府(1933)『普通学校朝鮮語読本:巻四』
朝鮮総督府(1933)『普通学校朝鮮語読本巻四編纂趣意書』
朝鮮総督府(1934)『四年生普通学校朝鮮語読本:巻四』
朝鮮総督府(1935)『普通學校四年生國語讀本卷六編纂趣意書』
조선어학회(1945)『초등국어교본한글教授指針』군정청학무국
조선어학회(1946)『초등국어교본:중』군정청학무국
문교부(1949)『초등국어:3-1』
문교부(1955)『국어:3-2』
문교부(1956)『국어:3-2』
문교부(1965)『국어:3-2』
교육부(1992)『국어:쓰기 5-1』
교육부(1996)『국어:말하기・듣기 3-2』
교육부(2001)『국어:읽기:4-1』
교육과학부(2010)『국어:읽기:3-2』
교육부(2015)『국어:가:3-2』
栗原一登他(1992)『国語:わかば 3 上』光村図書出版

栗原一登他(1996)『国語:わかば 3 上』光村図書出版
宮地裕他(2000)『国語:あおぞら 3 下』光村図書出版
宮地裕他(2002)『国語:わかば 3 年上』光村図書出版
宮地裕他(2005)『国語:わかば 3 上』光村図書出版
宮地裕他(2011)『国語:3 下あおぞら』光村図書出版
甲斐睦郎他(2015)『国語:3 下あおぞら』光村図書出版
光村図書出版株式会社(2015)『小学国語　学習指導書　三下　あおぞら』
光村図書出版株式会社(1992)『小学校国語　学習指導書　三上　わかば』

「うさぎのさいばん」関連

朝鮮総督府(1925)『普通学校朝鮮語読本:巻六』
朝鮮總督府(1925)『普通學校國語讀本巻六編纂趣意書』
朝鮮総督府(1933)『普通学校朝鮮語読本:巻一』
朝鮮総督府(1933)『普通学校朝鮮語読本巻一編纂趣意書』
교육부(1983)『국어:3-2』
교육부(1989)『국어:3-2』
교육부(2000)『국어:읽기:3-1』
교육과학부(2010)『국어:읽기:3-1』
교육부(2015)『국어:가:3-1』
中洌正堯他(2011)『小学生の国語:3 年』三省堂出版
中洌正堯他(2015)『小学生の国語:3 年』三省堂出版
『小学生の国語』編集委員会編著(2011)『小学生の国語:学習指導書』三省堂出版
『小学生の国語』編集委員会編著(2015)『小学生の国語:学習指導書』三省堂出版

「スーホの白い馬」関連

石森延男他(1965)『しょうがくしんこくご:2 年下』光村図書出版
石森延男他(1968)『しょうがくしんこくご:2 年下』光村図書出版
石森延男他(1971)『しょうがくしんこくご:2 年下』光村図書出版
石森延男他(1974)『しょうがくしんこくご:2 年下』光村図書出版
石森延男他(1977)『しょうがくしんこくご:2 年下』光村図書出版
石森延男他(1980)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
石森延男他(1983)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
石森延男他(1986)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
石森延男他(1989)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
栗原一登他(1992)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
栗原一登他(1996)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
宮地裕他(2000)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
宮地裕他(2002)『こくご:赤とんぼ 2 年下』光村図書出版
宮地裕他(2005)『こくご:赤とんぼ 2 下』光村図書出版
宮地裕他(2011)『こくご:2 下赤とんぼ』光村図書出版
甲斐睦郎他(2015)『こくご:2 下赤とんぼ』光村図書出版
光村図書出版(1968)『小学新国語:学習指導書 2 年用』光村図書出版
光村図書出版株式会社(2015)『小学校国語:学習指導書:二下赤とんぼ』

その他

井上ひさし他(1996)『新編新しい国語:3　上』東京書籍垣内松三他(1954)『中等新国語:文学編二年下』光村図書出版
木下順二他(2005)『ひろがる言葉:小学国語 4 下』教育出版
教育出版株式会社編集局編『ひろがる言葉:小学国語:教師用指導書:研究編4下』教育出版

ウェブサイト

「〈生涯現役〉李錦玉さん(76)「赤い鳥文学賞」を受賞した詩人、児童文学者」『朝鮮日報』WEB版』(http://chosonsinbo.com/jp/2005/08/syougai_050829/)2017 年 12 月 2 日接続